

核戦争勃発か

人類共同体創成か

核戦争勃発か人類共同体創成か

目次

第一章 人類共同体哲学のパイオニア

1	『Japan as an Immigration Nation』の人類史的意義	2
2	新世界秩序の創成における日本の使命	4
3	人類の救世主が立ち上がる時	7
4	憲法第九条を遵守する覚悟が国民に求められる	9
5	「移民を温かく迎える天皇を戴く日本」(The Economist)	10
6	明仁天皇のおことばの歴史的意義	13
7	日本の移民国家ビジョン——人類共同体の創成	14
8	坂中理論の根本にあるもの——生命共同体思想	16
9	私たちは人類愛で世界の存亡の危機を救う	19
10	人類共同体哲学は人類の知的共有財産	22

第二章 人類の救世主と呼ばれる日本人

1	坂中論文の歴史的意義	26
2	坂中論文が坂中英徳の一生を決めた	28
3	坂中論文の初心に返って大業に挑む	32
4	坂中英徳の単数意見から国民の多数意見へ	38
5	移民政策の世界は坂中英徳の独壇場	43
6	入管時代の思い出	49
7	日本一の夢想家の夢	53
8	筆一本で移民国家の創建にいどむ	56
9	人のやらないことばかりやった	58
10	大きな夢を描けば美しい花が咲く	60

第三章 坂中英徳は人類の希望の星

1	目指すべきは核兵器のない世界	64
2	ホモサピエンスは地球上から姿を消す運命なのか	67

3	人類共同体哲学の先駆者	71
4	「和をもつて貴し」が日本の国柄	74
5	目指すべきは世界でいちばん移民に開かれた国	75
6	日本革命から世界革命へ	77
7	西洋文明の時代から日本文明の時代へ	80
8	私たちは人類同胞意識を有する地球市民をめざす	83

第四章 世界の評価が先行する日本の移民政策

1	南カリフォルニア大学での講演	88
2	救世主 (The Domsday Doctor)	90
3	「移民革命の先導者」(ジャパンタイムズ)	92
4	「人口危機をロボットが救う?」(ワシントン・ポスト)	95
5	「移民政策のエキスパート」(ワシントン・ポスト)	97
6	ウォール・ストリート・ジャーナルの日本革命論	102

第五章 被爆国日本は核戦争を絶対許さない

1	天職を独り占めする職業人生	106
2	坂中英徳著作集	110
3	移民法制——移民法・移民庁・移民協定・人類共同体宣言	114
4	坂中英徳は移民国家日本の象徴的存在	116
5	公明正大の道を歩んだ	119
6	人類の救世主の出番が来た	121
7	人類共同体社会の創造か、核戦争による人類の滅亡か	123
8	憲法第九条を擁する日本が国際貢献するとき	126

第一章

人類共同体哲学のバイオニア

1 『Japan as an Immigration Nation』の人類史的意義

米国の出版社から論文集が出版された。「Japan as an Immigration Nation: Demographic Change, Economic Necessity, and the Human Community Concept」(LEXINGTON BOOKS、二〇二〇年二月)である。

日本の移民政策の全体像、人類共同体思想のエッセンス、日本革命と世界革命の必然性ならびに日本の移民国家ビジョンの持つ創造性および普遍性について論じた。また、世界の移民政策の歴史的転換を各国政府に迫った。人類共同体社会の理念に基づき世界の人道危機を救うことを究極の目標にすえる雄編である。

なお、北朝鮮残留を余儀なくされた日本人妻と北朝鮮残留邦人の帰国問題について一章を割いて論じている。日本人妻等の帰国問題がもう一つの拉致問題として世界に広く知られる契機となることを願っている。

本書は人類共同体哲学の世界展開を志したものである。新型コロナウイルス問題の深刻化に伴う国境封鎖、人種差別意識の顕在化など世界秩序が崩壊寸前の状況下にある最中、世界の人々に夢と希望を与える書籍としてブックレビューを果たした。その推薦文

において人類共同体哲学の創造性並びに普遍性を世界の知性が評価するという身に余る
光栄に浴した。

この英文図書は国の内外の知識人から衝撃をもって迎えられた。たとえば一九七五年の坂中論文以来の知友である谷口智彦慶応義塾大学教授から「Three cheers」[A beautiful accomplishment]「快挙達成」という言葉をいただいた。

この英語版書籍は世界各国の移民政策に深刻な影響が及ぶと予感する。世界の評価があつて初めて日本人の業績を評価する日本政府に移民開国を迫る決定打になるだろう。二二世紀初頭、人類共同体の理念を体現した移民国家日本は世界の移民国家の最高峰としてそびえ立っているだろう。

もともとは国家公務員の仕事を終えた深夜の時間帯に文書を綴るアマチュアの物書きに過ぎなかったが、寝食を忘れて二〇〇〇本の論文を積み上げた実績に照らすと、私は論文の作成が習性となった人間と言えるのかもしれない。

2 新世界秩序の創成における日本の使命

コロナウイルス問題が終焉を迎えた後の後遺症は極めて深刻なものになるだろう。第二次世界大戦後から七七年間続いた世界秩序の崩壊は避けられないと見ている。世界が百年に一度の大動乱の時代に入るのは不可避と認識している。特に人口の激減が重くのしかかる日本経済と日本社会は再起不能の事態に追い込まれるおそれがあると心配している。

移民鎖国の問題に絞って言えば、農村部では技能実習生が来なくなつて野菜が作れないと農民が悲鳴を上げている。理由は明白だ。移民政策を毛嫌いし、永住者として外国人を遇することを拒み続けた失政のつけが回つたということである。人口減が加速する第一次産業地帯においては、コロナウイルスの問題とは関係なく、まもなく農村・山村・漁村の多くが自然消滅の日をむかえる。

深刻な後継者難で瀕死状態に陥つた農村・山村・漁村は臨終の日を静かに待つしかない。長年にわたり非人道的な技能実習制度で外国人をこき使つた民族の成れの果てと言わざるを得ない。

コロナウイルス問題の終息の目途が立つと、政府は日本の生き残りをかけて移民開国を決断すべきだ。それ以外に国の延命策はない。その場合、私はこれまで「移民五〇年間一〇〇〇万人構想」を提案してきた。しかし時代を読めない政府の無為無策が続き、国勢が奈落の底にまで落ち込んだ今となつては「移民五〇年間二〇〇〇万人」が必要と考えている。「二五〇年間四〇〇〇万人の人口減少」に持ちこたえる経済力も財政力も今の日本にはないからだ。この件も「移民政策はとらない」と言い続ける内閣総理大臣の政策転換をお願いする。それすら決められない国の明日はないと断言してはばからない。

ここから世界秩序の崩壊危機に突入した世界情勢に目を転じる。プーチンロシア大統領のウクライナ侵攻に端を発し、「アメリカ文明と中国文明」の激突、言い換えれば「民主主義体制と共産党の独裁体制」の冷戦、ひいては第三次世界大戦の勃発の危険性すらあると、私は世界情勢を大変心配している。双方とも尊大な国民であるから適当なところで折り合いをつけるのは困難と思われる。仲介役を買って出る大国も見当たらない。両者の覇権争いは行くところまで行くしかない」と強い危機感に襲われる。

アメリカ合衆国とは強固な同盟関係にあり、地理的に東アジアに属する日本国はきわ

めて難しい立場に追い込まれると覚悟しなければならぬ。むしろ日本が出る幕がないのは言わずものがなである。

さて私は第三次世界大戦後の新しい世界秩序の創造においてアメリカ文明と中国文明の恩恵を受けた日本文明が中心的役割を果たす必要があるとつとに提言している。私たちは日本史上初めての国際責任を果たすため、米国、中国につぐ世界第三の経済大国の地位を死守するとともに、二〇〇〇万人規模の移民・難民を迎える覚悟を決める必要がある。

その場合、新しい世界秩序を打ち立てる気骨のある政治家に日本のかじ取り役をお願いする。「人類の救世主」の名で知られる坂中英徳は、第三次世界大戦後まで存命中であれば人類共同体思想が反映される国際法秩序の創造に向けて大車輪の活躍をする決意である。

3 人類の救世主が立ち上がるとき

私は途方もない夢を抱いている。日本人の和の心が詰まった移民国家日本の樹立だ。私の夢はさらに膨らむ。百年先を展望する移民政策研究のパイオニアは、人類が一丸となって人種と宗教の違いに起因する心の葛藤を克服し、人類共同体社会を創る大望を抱き、二二世紀中の実現を夢見ている。

新型コロナウイルスが世界中に蔓延した二〇二〇年。私は英文著作『Japan as an Immigrant Nation』（移民国家日本）と自叙伝『坂中英徳 マイ・ストーリー』を出版した。この二本の大作が、人類が人類共同体社会を創建するときの教科書として活用していただければうれしく思う。

さて、世界のモデル国となる移民国家をつくるという夢は私の頭に浮かんだ小さな夢にすぎなかった。ところが奇跡が起きた。二〇二二年七月現在、私は人類の存亡の危機を救う「人類の救世主」という立場に身を置くことになった。時代の要請なのか、世界の要請なのか、いずれにせよ第三次世界大戦の危機が迫る世界が人類共同体哲学の元祖を緊急に必要としたということである。世界の知性が「人類の救世主」と命名した坂中

英徳に大役が回ってきたということである。誠に恐れ多いことであるが、人類の命運が人類共同体思想の提唱者の双肩にかかることになった。

ひとりの日本人が背負う責任でこれ以上に重いものはないと認識している。どこまでやれるかわからないが、世界の知識人と夢を共有し、これを正夢にするため全力を尽くす決意である。

最近の私は、人種差別と排外主義の考えが世界中に蔓延するのを防ぐため、世界の知識人の協力を得て人類共同体論を世界に向けて発信中である。これが実際に実を結ぶのは二〇〇年後のことだと思うが、人類共同体哲学が世界の人々の心の琴線に触れる時代は比較的近いのではないかと予感する。以下は私の未来予測である。

〔西欧文明が主導してきた世界秩序が崩壊し、あるいは大量核兵器を使用する第三次世界大戦の勃発の危機性が高まり、今世紀前半中に人類共同体哲学は新世界文明を支える根本理念と位置づけられる。〕

4 憲法第九条を遵守する覚悟が国民に求められる

日本文明の消滅は世界文明にとっても歴史的損失であると主張している。一九七五年の「坂中論文」から二〇二二年の「移民国家日本は世界の頂点をめざす」まで日本の人口問題と移民政策の関係について思索を深めてきた。坂中移民政策論の頂点をきわめる著作が二〇二〇年二月刊の『Japan as an Immigration Nation』（移民国家日本）だ。この本の中で人類史を塗り替える人類共同体の理念を打ち立てた。世界の代表的知性がその人類史的意義を認めた。

近未来の世界において人類共同体思想を中心概念にすえる坂中ドクトリンは人類の知的共有財産に発展するだろう。

岸田文雄首相に衷心よりのお願がある。日本の移民政策のあり方について国民の関心が高まる中、日本国憲法を改正する場合、憲法の中に「移民の章」を新設し、移民の法的地位、移民の権利及び義務、日本人と移民の共生に関する規定、並びに人類共同体宣言に関する規定を設けていただきたい。

憲法に移民政策関係の条項を盛り込む趣旨は、移民国家として生まれ変わる日本が国

際社会において名誉ある地位を占めるためである。日本国憲法の中に「人類共同体宣言」を明文化すれば、人類共同体コンセプトを包含する平和国家の理念は憲法第七条と並んで世界の普遍的理念として永遠に光り輝くであろう。以下は坂中英徳の遺言である。万一にも第三次世界大戦（核戦争）が勃発した時の日本国民の行動規範に関する金言である。

〈第一に、私たちは日本国憲法第九条の根本精神を遵守し、いさぎよく降参すること。第二に、尊い命を守った上で外国勢力の占領下で堪え難きことに堪え、人類共同体哲学の反映された世界平和秩序の礎を築くためリーダーシップを発揮すること。〉

5 「移民を温かく迎える天皇を戴く日本」(The Economist)

二〇一六年八月九日、英国エコノミスト誌のサラ・バーク東京支局長の取材を受けた。取材に対し、英国を筆頭に主要移民国家の移民排斥の動きに危機感を覚えること、今こ

そ日本政府が人類共同体の理念を掲げ、五〇年間で一〇〇〇万人の移民を迎えると、世界の人々と約束する時であること、政治家が移民立国に向けて動き出したことなど、日本の移民政策をめぐる最近の動きと、日本型移民政策のエッセンスを説明した。

なお、天皇が退位の意向を示された同年八月八日の翌日の取材であったから日本皇室のことが話題にのぼった。私は「明仁天皇は常に世界平和と世界の人々の幸せを願っておられる」旨を強調した。

すると移民政策研究所長が唱える独創的な移民政策を紹介する記事が出た。『The Economist』（八月二〇日号、二〇一六年）の「日本への移民——狭き門が開き始めた」と題する記事である。坂中英徳移民政策研究所長の移民一〇〇〇万人構想と、石破茂衆議院議員の移民政策に関する見解を紹介の上、同誌は以下のとおり日本の移民政策の動向に言及し、日本の移民政策に関する特集記事を結んだ。

「坂中氏と石破氏は、移民には、日本語と日本の風俗習慣を学び、かつ日本の皇室に敬意を払ってもらおう必要があると考えている。いずれにしろ、日本は経済的理由で大量の移民の受け入れが避けられない。日本復興を強調する安倍首相の選択肢も

それしかない」

日本の皇室と日本の移民政策を結びつける発想は日本人にはないものだ。王室を戴く英国人ならではの見方である。日の丸と神社の鳥居のイラスト入りで移民政策と皇室の安寧との一体関係を暗示したこの記事は、海外のみならず国内でも大きな反響を呼んだと承知している。深く考えて見ると、移民に王室への敬意を表してもらおう必要があるという考えは世界の常識であったのだ。

『エコノミスト』の移民特集記事は、教育重視の日本スタイルの移民政策の特色と、国籍・人種・民族・宗教の違いに関係なく万人を懐に温かく迎える日本皇室のすばらしさを世界の人びとに紹介し、従来の移民鎖国の日本イメージの歴史的転換を迫るものであった。

私はこの記事の意義を以上のように理解した。わたし自身も日本の移民国家ビジョンが世界の注目の的になるという身に余る光栄に浴した。

明仁天皇は『エコノミスト』の移民特集記事に目を通されたと推察する。

6 明仁天皇のおことばの歴史的意義

二〇一八年二月二〇日の記者会見において明仁天皇（現上皇）は、外国人の受け入れに関する指針を明らかにされた。その歴史的意義はいくら強調してもし過ぎることはない。

明仁天皇の心のもった発言に注目する国民はひとりもいなかった。しかし、世界の知性が「ミスターイミグレーション」と評価する坂中英徳が、日本の移民政策に関する金科玉条として日本史に刻む。

「今年、我が国から海外への移住が始まって一五〇年を迎えました。この間、多くの日本人は、赴いた地の人々の助けを受けながら努力を重ね、その社会の一員として活躍するようになりました。こうした日系の人たちの努力を思いながら、各国を訪れた際には、できる限り会う機会を持ってきました。そして近年、多くの外国人が我が国で働くようになりました。私どもがフィリピンやベトナムを訪問した際も、将来日本で職業に就くことを目指してその準備に励んでいる人たちと会いました。

日系の人たちが各国で助けを受けながら、それぞれの社会の一員として活躍していることに思いを致しつつ、各国から我が国に来て仕事をする人々を、社会の一員として私ども皆が温かく迎えることができるよう願っています。また、外国からの訪問者も年々増えています。この訪問者が我が国を自らの目で見て理解を深め、各国との親善友好関係が進むことを願っています。」

「天皇陛下お誕生日に際し」（平成三〇年十二月二〇日、宮内庁）

7 日本の移民国家ビジョン——人類共同体の創成

二〇一四年四月、南カリフォルニア大学日本宗教・文化研究センター主催の「日本の移民政策に関するシンポジウム」において基調講演を行なった。

[Japan as a Nation for Immigrants: A Proposal for a Global Community of Humankind] のタイトルでスピーチした。約四〇名の研究者が私の話に耳を傾けた。多くの質問が寄せられた。人類共同体の創成に挑む私の熱い思いは世界の知識人に伝わったと思う。

主催者のダンカン・ウィリアムズ南カリフォルニア大学准教授(日本仏教学の権威)は、「坂中さんの移民政策を世界に紹介する『小さな企画』です」といわれた。日本生まれの日本育ちのダンカンさんは謙虚な人だが、私にとってそれは「人類共同体思想を世界に披露する最高の舞台であり、『大きな企画』であった」と感謝している。何よりも日本語のスピーチ原稿「日本の移民国家ビジョン——人類共同体の創成に挑む」を格調高い英文にしていた。だいた。

そのときすばらしい英語に翻訳された人類共同体思想すなわち「人種・民族・宗教の違いを超えて人類が一つになる移民国家の理念」が世界に羽ばたき、世界の移民政策に深刻な影響が及ぶと直感した。私の唱える人類共同体哲学のエッセンスは次のとおりである。

（日本人は古来、人間はもとより動物、植物、鉱物など自然界に存在するあらゆる物と心を通わせ、自然に親しみ、そこに神がやどると信じている。自然と自己を同一視する万物平等思想（アニミズムの自然観）を抱いている。これは人類を含む万物の共生につながる自然哲学である。万物の霊長の思い上がりを戒める日本人の叡

智である。)

8 坂中理論の根本にあるもの——生命共同体思想

日本の移民政策の基本理念の人類共同体思想はどこから生まれたのだろうか。日本の移民国家ビジョンの核心に迫る。

世界の移民政策の専門家は人類の多様性を強調し、社会統合を目標にかかげる。それに対して私は人類の同一性を強調し、人種・民族・宗教の違いをこえて人類が一つになる人類共同体の理念をうたう。

日本の移民国家ビジョンは、人類共同体国家の創設、地球規模の人類共同体社会の創成、永遠の世界平和体制の構築の三本柱からなる。二二世紀の新世界秩序の創造を視野に入れた人類未踏の未来構想である。それは西洋的理性の頂点を超える日本的感性の世界展開である。

人類共同思想の原点として原始社会から綿々と絶えることのない日本人に特有の心根

すなわち和の精神がある。

それは日本人のアニミズム的自然観から生まれたものである。一万五〇〇〇年も太平の世が続いたとされる縄文時代（狩猟採集を生業とする新石器時代）に起源を有し、現代の日本人の心の奥にも刻まれている「生命共同体思想」が坂中理論の根本にある。

縄文人とその末裔たちは、地球上に存在するすべての生命体すなわち人間も動物も植物も「天地から生まれた同類」という自然の摂理を知っていたと思われる。これは生物学、化学、物理学など現代の自然科学が到達した自然認識とも一致する。

令和の私たちは、男女の平等を旨とし、幼い子供の命を尊ぶ古代人の生き方や、自然との共生の心があるアイヌの人々の生き方から学ぶ点が多いと思う。

さらに言えば、日本人の心の中には文明社会では極めてユニークな自然観——つまり自然界に存在する万物を崇拜するアニミズム（精霊信仰）の世界が広がっている。動植物の仏心を描いた江戸時代の画家・伊藤若冲は日本精神を体现する美術界の至宝である。「生類憐みの令」（一六八七年）を發布したユニークな政治家（徳川綱吉）を生んだ国である。日本人の心には「閉さや岩にしみ入る蟬の声」（松尾芭蕉の俳句）の情景を心地よいと感じる感性がある。花や虫のはかない命を惜しむ源氏物語の風流を解する心がある。

人類は多様な人種と民族と国民に分かれているが、そのおおもとは一つだ。人類は生物分類学上ホモ・サピエンスという一つの種に属し、根の部分の文化と価値観は共通するところが大部分だ。人種や民族が異なっても、人類はヒトとしてのアイデンティティを持ち、相互にコミュニケーションし、相互に共感し、相互に理解できる存在である。「何が正義で何が悪か」の正義感や「何がうまいか何がまずいか」の味覚も全人類に共通する。私は、よろずの神々と共生し平和に暮らした縄文人の子孫のひとりとして、「生物としての人類は一つ。人種や民族の違いはあっても同じ人間。文化や価値観の違いはあってもごくわずか」という普遍的な人類像に基づき、すべての人類が和の心で一つにまとまる人類共同体社会の創生を移民国家日本の究極の目標にかかげる。

坂中理論は高邁な理想論なのかもしれないが私は真剣である。生物学的には同類である人類の本質に照らすと、平和の遺伝子を多量に持っている稀有の存在の日本人が人類共同体の創造を国の目標に掲げてもそれは根拠のない空理空論ではない。一〇〇年単位の時間はかかっても「人類は一つ」という人類の真相を直感的にとらえた縄文人の血を引く民族が心一つにして取り組めば実現の可能性は十分あると考えている。

二二世紀中には、二一世紀の日本人の頭に浮かんだ人類共同体哲学が世界の人道危機

を救う希望の星としてきらめく時代が訪れるだろう。日本の豊潤な精神風土の下で誕生し成長した人類共同体哲学に関する建設的な議論が国の内外で繰り広げられる日を心待ちにしている。

9 私たちは人類愛で世界の存亡の危機を救う

空前の規模の移民を入れても人口の激減がさけられない五〇年後の日本はどこに向かうのだろうか。人口減少期を生き抜くために私たちは何を新しい国の目標に定めればいいのかのだろうか。

今と同じ世界有数の経済大国や軍事大国の地位が望むべくもないことは論をまたない。そんな旧態依然の国家目標に代えて、二一世紀の移民大国にふさわしい新国家理念を提案する。

移民国家・日本は人類愛で世界の移民国家のトップの座を目ざす。世界に先駆け、九〇〇〇万人の日本人と一〇〇〇〇万人の移民が協力し、一億の国民の心がうちとけて一

つになる人類共同体社会の樹立である。

それはまた、唯一の戦争被爆国の日本が、核戦争の危険が迫るなか、世界平和運動でリーダーシップを発揮することを意味する。

移民国家日本の最終目標は、世界の諸民族が和の心で平和を共有する人類共同体社会の創成である。しかるに私が日本型移民国家の世界的展開にチャレンジしようとした矢先、エスノセントリズム（白人至上主義）を公言するトランプ大統領時代の米国をはじめ英国、フランス、ドイツで移民憎悪派や排外主義者たちが勢力を伸ばしている。

以下は、移民氷河期の到来と坂中移民政策論の関係に関する所感の一端である。

（世紀の人道危機時代と遭遇し、移民一〇〇〇万人構想と人類共同体思想は人類の生き残りがかかる世界的意義を有するものになった。日本が移民国家に転換すれば、これまで移民政策で世界に何ら貢献してこなかった日本の名誉が回復する。のみならず移民に新天地を提供し、移民に幸福を求める権利を保障し、人道危機に見舞われた移民に生きる勇氣と希望を与える。）

私の移民政策理論の進展を見守ってくれた海外の友人たちは、移民国家の理想像の創作と人類共同体社会の創生を一体不可分のものと関係づけた移民国家の新理論を坂中移民革命思想の到達点と評価する。

和を尊ぶ日本精神から生まれた移民国家の新理念が世界文明の新地平をひらく夢を持ち続ける。近未来のいつの日か、平和の心をはぐくむ日本の精神土壌で育った人類共同体哲学が、世界の人々を和解に導く星としてきらめく時代が訪れると確信する。

世界の大半の人々は、東洋の孤島に住む日本人が立てた崇高な世界ビジョンを実現不可能の夢物語と考えているであろう。しかし、次に述べるように、心が広い日本人が真っ先に人類共同体世界を実現するという私の信念は決して揺るがない。

〈異なる民族と宗教に対する精神的許容量が大きい日本人は、人類社会がかかえる民族対立と宗教対立を円満に解決するすべを心得ている。あらゆる生命体に神がやどると考える日本人はすべての民族・宗教と公平無私につきあう稀有の存在である。世界各地で燃え上がる民族感情と宗教感情を和平の心でしずめ、民族問題と宗教問題を平和的に解決する潜在能力が日本民族のDNAとして備わっている。それは全

人類の和解につながる平和哲学である。地球上に存在するすべての人種・民族・宗教はひとしく平等であると考える近未来の日本人は戦争のない世界を創るといふ人類史的使命を帯びる立場から人類共同体社会と世界平和の実現に向かって邁進している。

10 人類共同体哲学は人類の知的共有財産

移民立国に執念を燃やす革命家は日本の国の枠を超えて世界に飛び出し、人類の未来を切り開く夢を抱いている。今日の世界で支配的になりつつある自国の利益第一主義に代わるイデオロギーとして人類全体の利益を最優先する人類共同体社会の理念を世界の知性に訴えている。

人類共同体思想と、それと一対不可分の関係にある世界平和思想は、二一世紀を生きる日本人が二二世紀を生きる地球市民にその実現を託する知的共有財産である。

究極の目標は日本人が主導して人類共同体思想を世界の普遍的理念にまで高めるこ

と、そして世界の人々を永遠の世界平和に導くことである。それは言葉の真の意味での世界平和哲学だ。

しかし高邁な理想を掲げる坂中英徳に新しい世界秩序を創るリーダーシップと実行力が伴わないとそれは見果てぬ夢で終わる。日本人ができもしない夢物語を語ったと世界のひとびとの物笑いの種になる。それでは人類共同体論の口火を切った日本の一民間人に何ができるのだろうか。

世界のことを心配する前に私が真つ先にやるべきことがある。世界のモデル国となる移民国家へ日本を導くことだ。その場合、書齋にこもってあれこれ考えを巡らせているだけで行動力に欠ける私にできることは、警世の文章を死に物狂いで書き続け、ペンを武器に国民と政府を動かすことだ。

さいわい、ワシントン・ポスト紙、エコノミスト誌など世界の代表的メディアが、日本人の和の精神が詰まった移民国家ビジョンを高く評価している。コロナ禍のいま正に機が熟そうとしている。日本が新進気鋭の移民国家として世界の舞台に躍り出れば世界の移民政策にも変化が起きるはずだ。

もとより永遠の世界平和を実現することは微力な私の手に負えるものではないが、天

命の尽きる日まで人類共同体の灯りをともし続ける。日本の夢想家が著作物に刻んだ人類共同体哲学は永遠に輝いているであろう。二二世紀中には新世界秩序の創造を旗印に人種・民族・宗教・国籍を異にする地球市民が一斉に立ち上がるだろう。

第二章

人類の救世主と呼ばれる日本人

1 坂中論文の歴史的意義

処女作の坂中論文『今後の出入国管理行政のあり方について』（一九七五年）において外国人政策の基本方針を提案したことから移民政策の立案をライフワークとする道を選んだ。迷うことなく直観で決めた。その日から光陰矢の如くで四七年が過ぎ去った。その間、日本の移民政策を牽引する論文を大量に生産した。

無我夢中で努力したかいがあつて移民政策研究の第一人者の地位に上り詰めていた。人口秩序が崩壊する日本を移民政策で救う責任を一身に引き受ける立場になっていた。私の一生を野球人生にたとえれば、移民国家日本を打ち建てるため全試合に出て全力投球するものであつたと言える。

話は一九七五年に戻る。法務省入国管理局が「今後の出入国管理行政のあり方について」という課題で、入管職員から論文を募集した。この論文募集で私の書いた論文が優秀作に選ばれた。それによつて我が道が決まった。論文の審査委員長を務めた竹村照雄氏（当時法務省入国管理局次長）の選評が私の手元にある。

〈第一部優秀作の坂中論文は、その視点において、その構想において、その論証において、まことに見事なものであり、『二十五周年記念』とするに全くふさわしい内容というべきであった。審査員全員が一致してこれを優秀作に推したのである。出入国管理行政を世界史な変化発展の中で位置づけ、外国人の人権保障への明確な意識と国益との調和をめざして将来を展望し、しかもいたずらに理想に走ることなく、絶えず足下現実の問題に即し、これに立ち返りつつ議論を進める態度は、その考察の基礎となつている資料の豊富さとともに、力強く迫るものがあつた。〉

坂中論文は見識のある行政官に見いだされてうぶ声を上げた。しかし、その後は世間の荒波にもまれる未来が待っていた。

一九七七年、竹村照雄氏のすすめで論文が公にされるや、在日韓国・朝鮮人問題を考へるときの古典的文献と評価される一方で、二〇年近く研究者や活動家の間で賛否両論の激論が闘わされた。

坂中論文で述べた私の考えは四七年後の今も変わっていない。一〇〇年後の日本と世界を視野に入れた、先見の明のある論文であつたのだろう。在日コリアンの法的地位の

安定化や、難民の地位に関する条約への加入など、論文で提案した政策提言の大半が実現した。残された課題が世界最高峰の移民国家日本を創建することである。最近、移民政策に賛成する若者が急増するなど情勢が急展開したことを考慮すると、これも大願がかなう可能性が生まれた。

世紀の大構想が大詰めを迎え、坂中論文がたどった歴史を回想する時間が増えた。坂中論文と共に移民国家への道を切り開いた人生の幸福をかみしめている。著者の死と共に坂中論文は劇的な一生を終えるのが定めなのだろう。あるいは射程距離が長いこの論文は著者の死後も輝きを失っていないかもしれない。日本を移民国家に導いた論文として永遠に語り継がれるかもしれない。

2 坂中論文が坂中英徳の一生を決めた

私が初めて入管行政に携わったのは、法務省に採用された翌年のことだった。一九七一年の四月、二五歳の私は、法務省大阪入国管理事務所（当時）で実務研修を受

けることになった。

その頃、入管が担当する「出入国管理行政」というのは、ほぼ一〇〇パーセント在日韓国・朝鮮人をみすえたものであった。私は大阪での審査体験を通して、在日韓国・朝鮮人問題の本質について、ひとつの結論を導き出した。

それは、日本で生活する在日韓国・朝鮮人の「実体」が限りなく日本人に近い存在であるのに、「法律上」（法的地位）は外国人として日本に存在している矛盾をいかにして解消するか、というものであった。そして、できるだけ早く、在日韓国・朝鮮人の「法的地位」が「実体」と一致する存在、つまり日本国民となり、日本の出入国管理の対象でなくなる日がきてほしいと心から願うようになったのである。

しかし、当時は、差別を受けている在日韓国・朝鮮人やその民族団体側からはもちろん、行政の側からも、そういう考えはまったく取り合ってもらえないどころか、危険思想視され、どちらからも袋叩きにされるような時代だった。ところが、めぐり合わせか偶然のいたずらか、私のこの願いを形にするチャンスが数年後に訪れたのだ。それは一九七五年のことだった。

入国管理局が「今後の出入国管理行政のあり方について」というテーマで職員から論

文を募集した。この論文募集に若輩の私も応募した。審査の結果、私の書いた論文が優秀作に選ばれた。そのとき私の歩む道が決まった。坂中英徳の生き方を決めたのは坂中論文である。

法務省時代に初めて書いた坂中論文が政策論文の典型であったことが契機になって、それ以後移民政策に関係する政策論文を書き続ける職業人生を過ごすことになる。国家公務員を辞した後も天下国家のことに関心を持つメンタリティーは何ら変わらず、公務員時代にも増して移民国家の立国に関係する政策論文を猛烈な勢いで書いている。世界のジャーナリストから「移民革命の先導者」と呼ばれるゆえんである。

人口減少時代の新しい国の形を描く移民国家の発想はどこから生まれたのか。その答えは一九七五年に書いた『今後の出入国管理行政のあり方について』（坂中論文）にさかのぼる。坂中論文が移民国家構想の原点となった論文である。

一九七五年当時の私は、「移民」の入国を認めないとする入国管理の基本政策について、日本の人口動向などを考慮して総合的に判断すると、今後も引き続きとるべき政策であると考えていた。その理由は以下のようなものであった。

「二国の人口変動は出生、死亡及び移住の三つの要因によって生じるが、現在すでに超高密度国である我が国の人口が近い将来にわたって出生が死亡を上回る自然増加の傾向にあることがはっきりしている以上、日本の入国管理政策はこれからますます深刻の度を加える人口問題をこれ以上悪化させないという基本方針に沿ったものでなければならぬ。」

話は坂中論文から三〇年後の二〇〇五年に移る。同年の国勢調査の結果、日本の歴史的転換が明らかになった。経済と社会を支えてきた人口が減少局面に入ったのだ。政府の将来人口推計は、五〇年後の人口は今の三分の二に落ち込み、一〇〇年後は四〇〇〇万人台の人口に激減することを示していた。

二〇〇五年を境に日本の人口構造が増加から減少へと転換したことを受けて、「移民鎖国」から「移民開国」へと考えを根本的に改めた。移民の入国を認めないとする政策の前提がひっくり返ったからだ。

坂中論文の時代から人口と移民の関係について深く考えていたから、日本が人口減少期に入るやいなや移民国家のアイディアが自然に生まれた。『入管戦記』（講談社、

二〇〇五年三月)の「二〇五〇年のユートピア」で提案した「移民五〇年間二〇〇〇万人構想」である。

3 坂中論文の初心に返って大業に挑む

私の代表作である坂中論文が生まれた一九七五年といえ、サイゴンが陥落し、ベトナム戦争が終結したのは、その年の四月三〇日だった。

朝鮮半島では、その前年「文世光事件」という奇怪な事件が起きている。当時二二歳だった在日韓国人二世が、朴正熙韓国大統領を狙撃、暗殺は未遂に終わったが、陸英修夫人ほか二名が死亡した。

「金日成主席率いる北朝鮮によって、アメリカの傀儡政権でしかない韓国の朴軍事政権を倒し、朝鮮半島は統一されるべきだ」——七〇年安保はもはや過去の出来事となっていたが、大学キャンパスにはまだ学園闘争の残骸があり、そんな見方をする論客もかなりいたように思う。

左右のイデオロギーが激しくぶつかる「在日韓国・朝鮮人問題」という社会問題も、私が論じるよりもずっと適任と思われる学者や運動家がいかに違いない。

当時、法務省入国管理局には、連日、反入管運動の活動家たちが押しかけていた。実際問題として、そのようなエネルギーをまともに受ける覚悟を決めて、在日韓国・朝鮮人問題で発言することは容易ではなかったのである。まして入省五年目の当時の私は、入管行政に一步足を踏み入れたばかりの青二才である。

私はそんな大騒ぎになるとはつゆしらず、真正面から「在日朝鮮人の処遇」の問題で論戦を挑んだ。

ただ、私が幸運だったのは、左右のイデオロギーの相克であるとか、在日コリアンをめぐるさまざまな政治・社会運動、さらには、日本人による在日朝鮮人批判は許さないという排他的な在日朝鮮人社会の空気や、本音を語ることをタブー視する風潮など、そういういった夾雑物をいっさい排除した地平からこの問題を見通すことができたということではないだろうか。

在日韓国・朝鮮人の各グループや各運動体による「坂中論文」を使った勉強会がほうぼうで開催されているという話も聞こえてきた。論文の評価をめぐって激しい議論が闘

わされたこともあったようだ。

しかし、歴史的な経緯から建前と本音がぐちゃぐちゃに入り混じってしまい、現実を直視できなくなった「在日」世界においては、議論こそ活発であっても、実効性のある具体的な政策提言など何ひとつ生産してこなかったのだ。そんな世界で、「坂中論文」は、突如、生まれたのである。

在日韓国・朝鮮人が幸福に暮らせる制度を確立すべきという見解は、何もイデオロギーの助けを借りなくても考えつくものなのだ。日本生まれで日本育ちの二世・三世の法的地位を不安定なままにしておいてよいはずがない。それを正すべしという考えは一般常識から導かれるものである。

当時の私が考えたこと、行なったことを顧みると、自分が見たままを言葉にし、感じたままを文字にしたのである。それは行政官の立場からという以前に、「普通の人間」の人間的な思いやりから生まれたアイディアを文章にしたものにすぎないように思う。

最前線で行政と向き合っただけで敵対視していた活動家はともかく、日本社会の中で普通に日常生活を送っている在日韓国・朝鮮人は、日々、さまざまな不便や心ない差別といった障壁をなんとか改善してもらいたいという願いを持っていたに違いない。

私は、入管行政は「外国人」を相手にする仕事であるが、事のよしあしを決めるのは、結局、「外国人をひとりの人間としてどう見るのか」という人間観に帰着すると考えている。そして、私の論文を評価してくれた上司たちと私は、この「人間観」の部分で共通認識を持っていたのだと思っている。時代と人に恵まれなければ、ふとした感想を抱くだけで終わっていたかもしれない私の「在日韓国・朝鮮人社会への思い」は、まっすぐ提言へと向かい、さらに政策へと突き進むことができたのである。

あまりに多くの偶然と幸運に恵まれて、また、若さゆえの無鉄砲さもよい方向に働いて誕生した「坂中論文」は、時代にめぐりあったものと言えるのかもしれない。

さてその後、坂中論文は、行政組織としての入管にどのような影響を与えたのだろうか。概して在日韓国・朝鮮人社会に対しては「敬して遠ざける」空気が支配的であった当時の入管においては、むしろ、革命的な政策論を展開した「坂中論文」を積極的に受け入れる土壌などはなかったと認識している。だが、そうかといって、猛烈な反対の声が組織の中から上がるほど、それに反論することに熱心な人もいなかったのである。

そんな空気が醸成されると不思議なもので、組織全体としてあまり歓迎されない政策でも、積極的な反対の声が出てこないとなれば、それがいつのまにか独り歩きして政府

の方針にまでなってしまうということもあるのだ。

つまり、「坂中論文」が示した政策転換は、入管の中では明らかに坂中英徳ひとりの意見であったにもかかわらず、声を出して具体的な政策を提案したがために、組織の中で消極的に肯定されたのである。

その日は意外と早く訪れた。坂中論文から五年後の一九八〇年の春のことであった。法務省幹部から私に、「坂中論文で提言した政策の立法化」の特命がおりたのだ。私にとつてそれは、いわば自作自演の形で国の政策を実現するまたとない機会が与えられるという夢のような話であった。これ以上の名誉なことはないと使命感に燃えて任務を全うした。話は法改正の技術的なことになるが、「出入国管理令」という法律の題名を変えるとともに、ふたつの法律でひとつの法律を改正するという離れ業を演じる経験もさせてもらった。

そして、坂中論文において提言した政策の多くが、一九八一年の第九四回通常国会において全会一致で可決された。「出入国管理令の一部を改正する法律」（法律第八五号）と「難民の地位に関する条約等への加入に伴う出入国管理令その他関係法律の整備に関する法律」（法律第八六号）として実を結んだ。その代表的な成果が、在日朝鮮人に安

定した法的地位を保障する「特例永住許可制度」の新設であった。この二つの法律は翌一九八二年に施行された。在日韓国・朝鮮人問題に詳しい大沼保昭東京大学教授が新しい入管体制を「一九八二年体制」と命名したことを覚えている。

以上、坂中論文で難問の在日韓国・朝鮮人問題を解決の方向に導いた時代を振り返った。坂中論文で提言した在日韓国・朝鮮人政策は迅速に立法措置がとられたのである。奇跡としか言いようがないことが現実になった。

話は坂中論文が全盛だった昭和の時代から移民政策が政治課題に急浮上した令和の時代に移る。つまり正念場を迎えた「移民国家構想」を実現するため私がどういうスタンスで臨めばいいのかということである。坂中論文の遠大な理想を掲げ、足下現実を踏まえ、機が熟するのを待って困難きわまる問題を解決する手法は、移民国家日本を創建する場合にも参考とすべき点が多々あるのではないかと考えている。

ここで強調しておきたいことがある。朝鮮半島の植民地支配という在日に至る歴史的経緯と複雑な民族感情がからむ在日韓国・朝鮮人問題を円満解決に導いた歴史を鏡とすれば、私たちは世界の最先端を行く移民国家を創るのも決して夢ではないというのが、在日コリアン問題の解決で主導的役割を果たした坂中論文の著者の見解である。

以下は、在日コリアン問題の解決法を移民国家の建国に類推適用した場合の移民国家日本への道程である。

（若者を中心に国民の間から移民賛成の声が急増し、政治家があまり乗り気でなかった移民国家構想が人口危機の深まる日本を救う起死回生の策として独り歩きし、政府の基本方針に発展する。もともと移民国家ビジョンは坂中英徳の個人的見解にすぎなかったが、百年先を見通した実効性のある日本再建策をうち建てたことから政府部内で人口危機への最強の対応策との評価が定まり、日本の未来を託する新国家ビジョンとして認知される。そして超党派の国会議員の賛成で移民法その他関係法律が制定される。人類共同体思想を体現した移民国家日本が誕生する。）

4 坂中英徳の単数意見から国民の多数意見へ

三五年の入管人生において何回も左遷を経験するなどしんどいと思うことが多かつ

た。荒海に舟をこぎ出し、荒波にもまれ、難航が続く役人生活であった。在日韓国・朝鮮人の法的地位問題（一九七五年）に始まり、中国人偽装難民事件（一九八九年）、フィリピン人身売買事件（一九九五年）、日系ブラジル人問題（二〇〇〇年）、北朝鮮残留日本人妻問題（二〇〇二年）、そして人口減少時代の到来をみすえた移民政策の立案（二〇〇四年）など、出入国管理行政上の困難な課題と正面から取り組んだ。

行政官時代、当面する最重要課題にひとり立ち向かい、休まるひまがなかった。非難・罵倒・脅迫の集中砲火を浴び、心おだやかな時は少なかった。単独で国家的課題に挑戦する道を行んだが、本業のかたわら論文を書くのが心の支えになった。『今後の出入国管理行政のあり方について』（一九七五年）、『在日韓国・朝鮮人政策論の展開』（一九九九年）、『日本の外国人政策の構想』（二〇〇一年）、『入管戦記』（二〇〇五年）などの移民政策関係の著作や、入管法のコメンタールを書き続けた。

ルーチンワークを終えた深夜、移民政策について思索にふけるのが何よりの楽しみであった。政策論文を書くという精神安定剤を持っていたから反坂中の空気が充満する世界で何とか生きてこられたのだと思う。入管退職後は、論文の執筆に専念している。文筆に親しむ坂中英徳は老いてなお元気である。政策論文の創作という点では七七の年齢

の今が盛りなのかもしれない。二〇二二年には『移民国家日本は世界の頂点をめざす』など五冊の本を出版した。

政策論文一筋の人生を振り返ると、特にタブーとされる難題に挑むにあたっては、行動を起こす前に問題提起と決意表明の文章を全国紙や雑誌に発表するのを常とした。公表することで政策の実行を国民と約束し、退路を断って政策の実現につとめた。

移民政策一路の人生を一言で言えば、「坂中英徳の単数意見を国民の多数意見に変えるもの」と言える。

山あり谷ありの苦難の人生であったが、これも自分の選んだ道である。人生のたそがれどきの今は大好きな執筆活動を心ゆくまでやらせてもらった人生に感謝している。移民革命家の思想・信条・表現の自由がパーフェクトに保障される時代とめぐりあった幸福をかみしめている。

ここで総理大臣官邸と革命家の関係の一端について述べる。私はこの一〇年間、一〇冊を超える著書を官邸に謹呈し、著作物を通して意思疎通を図るといふ特別な関係を持ち続けている。国の将来を思う心が詰まった図書を政治家に送ったことが無意味であったとは思っていない。憂国の情のこもった著作が多少なりとも政治家の胸に響

いたに違いないと推察する。とりわけ二〇二〇年に謹呈した英文図書『Japan as an Immigration Nation』と自叙伝『坂中英徳 マイ・ストーリー』は多大の影響が及んだと思われる。

移民政策論文集が仲立ちする形で政府首脳と革命家との間の信頼関係がある程度進んだと思っている。たとえば、四〇〇〇万人の人口の自然減が避けられない中、移民政策を含むあらゆる政策を総動員して一〇〇〇万人の人口増を確保し、五〇年後も一億の人口の大きさを維持するという長期国家目標では一致する。

以上のような見方が正しいとすれば私は「政府首脳黙認の下で天下国家を論じる論客」ということなのかもしれない。あるいは破天荒な移民革命思想の持ち主が日本民族の消滅危機を救う救世主を必要とする時代とめぐり合い、政府首脳から自由奔放の活躍が黙認されたということなのかもしれない。

以下は『入管戦記』（講談社、二〇〇五年）の「はじめに」の抜粋である。これは国家公務員を退職した二〇〇五年に書いた「国の大転換」を求める檄文である。「坂中英徳の移民政策のすすめ」である。移民国家日本の建設が最終局面に入った今日、私にとつてこれは初心を忘れないための備忘録である。

（日本はまもなく、超少子化に伴い、世界の歴史上もあまり類のない急激な人口減少期に入る。政府は、二〇五〇年には一億人を切り、二一〇〇年には六四〇〇万人へと半減すると推計している。日本の未来はどうなるのだろうか。

人口激減社会に対応するため、明治維新に匹敵する国の大転換が求められることは必至である。幕末から明治にかけて「攘夷」と「開国」とで国論を二分する激論が闘わされたときのように、いまこそ、国の大改革に向けて、活発な国民的議論が行われるべきである。

私は、本書において、人口減少社会への対応のあり方として、移民政策の観点から、ふたつのシナリオを提示した。移民鎖国を堅持し、人口の自然減に全面的に従って縮小してゆく「小さな日本」の道と、人口の自然減を移民政策で補い、経済大国の地位を守る「大きな日本」の道である。どちらのシナリオを選ぶにせよ、人口減少社会に生きる私たちは厳しい試練に立ち向かわなければならない。

日本の百年の計を立てる重要課題について、国民の態度を決めるべきときが迫ってきた。新しい国のあり方を決めるのは国民である。そのための国民的な議論を期

待する。

とくに、私たちの未来は移民とどのような関係を築くかによって決定される。どうすれば移民と共生することができるのか。それは、日本のなかに「世界」を取り込むことである。異なる民族の存在を許容することである。私たち日本人にそういう未来社会を創る覚悟と矜持きやうじはあるのだろうか。

5 移民政策の世界は坂中英徳の独壇場

一九九五年の春のことである。法務省入国管理局入国在留課長として、それまで決して触れてはならないとされてきた興行入国者の問題にメスを入れた。そこは暴力団が暗躍する闇の世界だ。私は陣頭指揮をとって、一九九五年五月から翌九六年三月まで、興行入国者の「出演先」であるバー、キャバレーなどへの実態調査を全国規模で実施した。その調査結果はというと、調査した四四四件のうち、実に九三％にのぼる四一二件でホステス活動や売春行為などの不法行為が確認された。その調査結果を受けて、興行の

在留資格による入国者の規制を強化した。

この規制措置に対して、芸能人の招聘者であるプロダクションや、ホステスとして使っていたバーやキャバレーなどの飲食店の経営者が猛烈に反発した。

業界の意を受けた政治家まで登場し、「君はいったい何をやっているのだ。お前みたいな頑固者の役人があるから業界が迷惑するのだ。君は転勤したほうがいい」と圧力をかけてきた。入管行政に影響力を持つ政界の実力者（当時衆議院法務委員長）のゴリ押しに私は屈しなかった。法律を盾に正義を貫いた。

政治家から「頑固者の役人」と名指しされるほど法令遵守の立場をつらぬいた結果、一九九七年四月の人事異動で仙台入国管理局長の辞令を受けた。以後、二度と法務本省で勤務することはなかった。

福岡入国管理局長、名古屋入国管理局長、東京入国管理局長のポストを歴任し、二〇〇五年三月、法務省を退職した。

八年間の地方入国管理局長時代、私は何をやったのか。じつは引き続き興行入国者の問題の最前線で指揮を執るとともに、執筆活動に力を入れた。その成果物として、次の五冊の力作を出版した。著作物の執筆という天職に恵まれたから左遷のストレスに耐え

られたのだと思う。

- ① 『出入国管理及び難民認定法逐条解説 新版』（共著、日本加除出版、一九九七年）
- ② 『在日韓国・朝鮮人政策論の展開』（日本加除出版、一九九九年）
- ③ 『出入国管理及び難民認定法逐条解説 全訂版』（共著、日本加除出版、二〇〇〇年）
- ④ 『日本の外国人政策の構想』（日本加除出版、二〇〇一年）
- ⑤ 『入管戦記』（講談社、二〇〇五年）

①と③は、入管法コメンタールの決定版の大作である。入管法研究の第一人者が書いた権威ある解説書として司法の世界で今日も活用されている。②は、私の在日韓国・朝鮮人政策論の集大成の著作である。これを書いて第一のライフワークの在日朝鮮人問題に区切りをつけ、第二のライフワークである移民政策に本格的に取り組む心の準備が整った。以後、移民政策に関する理論的研究に全霊を傾けることになる。④は、「移民」という言葉こそ使っていないが、実質上移民政策論序説とすべき移民政策関係の論文を集めたものである。

もう一つ、真剣に取り組んだことがある。一九九七年の夏以降、一〇年以内に訪れる人口減少社会の移民政策に関する思索にふけた。その研究成果が、前記⑤の『入管戦記』第九章「二〇五〇年のユートピア」と第一〇章『『小さな日本』と『大きな日本』』である。その第九章の冒頭部分で以下のとおりユートピア物語と断っているが、当時の私の本心を言えば、それは人口減少期に入る日本の移民国家への歴史的転換を迫る「移民国家宣言」であった。

〈幕末の日本において「攘夷」か「開国」かの国論を二分する激しい議論が闘わされたときのように、いまこそ、明治維新のような国の大改革に向けて、もっともつと活発な国民的な議論が必要である。

私は「移民」をキーワードにして、これから日本が取るべきふたつの選択肢（「小さな日本」と「大きな日本」）を提示する。

日本が大きく舵を切って、二〇〇〇万人の移民を受け入れ、「多民族共生社会」の理想に向かって一路邁進したという前提で、二〇五〇年の日本の姿を描いてみようと思う。問題提起のためのプロローグ、あるいはひとつのユートピア物語として

読んでいただきたい。」

『入管戦記』第一〇章の論文・『小さな日本』と『大きな日本』は、人口減少時代の移民政策のあり方について深く考え進め、世紀の問題提起にしたいという大望を抱いて筆を執った。しかし、結果は空振り三振に終わった。この論文はあまりにも時代を先取りした移民国家ビジョンであったということなのだろう。一七年前の日本においてこの野心的な論文に関心を寄せる国民は皆無であった。政界、官界、経済界、学界からも反応がなかった。それ以後、「移民政策」という言葉が封印される時代が最近まで続く。

坂中ビジョンは完全に無視されたが、これを公にしたことが契機となって人口減少時代の移民政策のあり方に関する理論的基礎が固まった。なお、この論文を発表した二〇〇五年三月、私は三五年の入管生活を終えた。今ふりかえると、これは役人を辞めた後も移民政策の研究を続ける転換点となった論文である。世間から黙殺され、がしんしょうたん臥薪嘗胆の心に火がつき、自分が先頭に立って移民鎖国のイデオロギーとの闘いに挑む決心がついた。

顧みると、私の左遷時代は実り豊かなものであった。世界の移民政策をリードする移

民政策理論の完成につながる雌伏の八年であった。正義感に駆られるところがある私はたびたび左遷を経験したが、それが将来の飛躍の原動力になったと思っている。そればかりか「ミスター入管」「反骨の官僚」という名誉の勲章をもらった。移民政策研究の先駆けとして真つすぐの道を歩んだ入管生活に悔いはない。幸運にもマイノリティ問題を所管する入管に拾ってもらって無事つとめあげたから今日の坂中英徳があると感謝している。

ここで政府中枢と私との関係について述べる。前述のとおり悪徳業界とつるんだ政治家の圧力で左遷の辛酸をなめた。しかし、移民政策の原案の作成に限って言えば、総理大臣官邸と私との関係は良好なものであったと言える。私の独断専行の行動に対する批判もなかった。日本の歴史を画する政策提言は大筋で容認されたと理解している。

また、移民政策に関心を持つ政治家が不在で、結果的に移民国家を創建するための設計図を描く大役が移民政策研究所の所長の手に委ねられたことが、国家・国民にとってとてもハッピーな結果をもたらしたと考えている。移民政策の世界は坂中英徳の独壇場に終始した。政治家の圧力も組織の制約も受けることがなかった。人間関係にわずらわされることもなかった。全くの自由人として移民国家のあるべき姿を思い描くこと

ができた。

6 入管時代の思い出

三五年の入管時代、心の自由のままにやりたいと思うことを自由にやらせてもらった。二〇〇五年三月、法務省の最高幹部から、「坂中さんの歴史は入管の歴史そのものであった」という送別の辞をいただいた。役人冥利に尽きる入管生活であったと感謝している。

二〇〇五年に入管を辞めた後はボランティア活動として入管時代にやり残した仕事すなわち移民政策の立案と取り組んでいる。移民国家という新しい国づくりである。一人で国家百年の大計に挑み、天運を独り占めし、世界の知識人から「日本の救世主」と呼ばれる立場に身を置くことになった。

五〇年の職業人生を振り返ると、在日朝鮮人政策および移民政策をテーマに死闘を繰り広げるものであった。要するに入管行政の本流を歩んだ。国家公務員を辞めた後も公僕としての矜持きよもちを持ち続けた。移民政策研究所所長の立場から天下国家のことを自由自

在に論じている。入管法と移民政策の研究にも余念がない。結果的に入管以外の世界のことを知らない専門バカの間人間になった。いつも入管と共にあった。「ミスター入管」として生涯を終える定めなのだろう。

私が入管に就職した一九七〇年代の入管行政の喫緊のテーマは在日朝鮮人の法的地位問題であった。「ニューカン」という役所は専ら在日朝鮮人の在留手続きを担当するところであった。当時は入国管理局が何をする役所かを正確に知る国民はごく少数で、入管は無名の存在であった。よく税関と間違えられた。

二〇二二年のいま移民政策で時代が動いた。政治が動いた。二〇一九年四月に施行された改正入管法で在留資格が大幅に拡大された。入管の果たすべき役割も日本人と外国人の共生社会をつくることなど広がった。入管組織を大幅に拡充した出入国在留管理庁が発足した。国民の期待を背負って門出する入管の諸君の責任はこれまでの何倍も重いものになった。

政府の立てた将来人口予測によると、五〇年後は今よりも四〇〇〇万人減る。一億の大台を切って九〇〇〇万人ほどになる。五〇年後の日本社会は、一四歳以下の年少人口——これから結婚し、子供を産む世代が一人に対して、年金生活者の六五歳以上の高

齡人口が五人と、子供が街から消える社会、高齢者の存在が際立つ社会に変わる。それが人類史上どれほど異常な社会であるかは想像にまかせる。

二〇二一年の新生児の数が八〇万人を割った。今後もその数は減少の一途をたどる。その場合、自衛隊、警察、消防、そして入管において国の基本秩序を現場で支える職員の確保が極めて困難になるのは必定だ。伸び盛りの入管が先頭を切って、入国審査官・入国警備官の相当部分を外国人材（移民）に頼らざるを得ない時代が訪れると私は見ている。

たとえば、二〇一八年七月の西日本豪雨で二〇〇人の人がなくなった。そのうち一〇代が一人、二〇代が一人で、この二人以外は六〇歳以上の高齢者であった。水害が起きると、NHKは決まり文句のように「二階に上がりましょう」と言うが、一人暮らしで二階まで上がれない七〇歳以上の人が多く亡くなっている。若者がいなくなつて青年団も消防団も機能していない。村役場の職員も若手は少数。子供がいなくなつた村の小学校は廃校になり避難先もない。政府は農山村地帯の村落の多くが壊滅寸前の危機にあることを直視すべきだ。

最近の私は、仮に画期的な移民政策をとつたとしても、すでに遅きに失し、日本の再

生はかなわぬと絶望感にさいなまれる日々である。

法務省を退職してから一七年が経過した二〇二二年四月。前述のとおり出入国在留管理庁は出入国在留管理の仕事に加えて「日本人と外国人の共生社会をつくる仕事」を担うことになった。政府首脳は法務省出入国在留管理庁が新しい国づくりの中心的役割を果たすことを期待している。

近い将来、もっと大きな組織——たとえば「移民省」という名の役所が必要になると考えている。そのような大がかりな国家行政機関を設置し、政府が総力を挙げて移民政策と取り組まなければ、国民的コンセンサスの下で一〇〇〇万人規模の移民を適正かつ円滑に受け入れることができないからだ。

最近の私は、移民国家と移民社会の樹立については、移民政策研究所所長の出る幕ではないと心に決めている。一〇〇〇年以上続いた移民鎖国体制をくつがえすところまでが革命家の私の仕事である。そのめどが立てば、そのあとのことは政府と行政の責任で成し遂げてほしい。世紀の大事業を完成させるのは政治家と行政官の仕事だ。その場合、入管OBの書いた五五冊余の移民政策論文集を参考文献として活用していただければうれしく思う。

二〇二二年七月現在の私の最大関心事は、コロナウイルスの惨禍に見舞われる数年前から反移民・反難民に走る米国、英国、ドイツ、フランスなど世界の移民大国の動向だ。移民政策の専門家の眼には、世界の主要移民国家は常軌を逸した人種差別と白人至上主義の方向に暴走しているかのように映る。このまま行ったら世界はどうなるのか非常に心配である。そのような危機感から英語版論文集の決定版『Japan as an Immigration Nation』(LEXINGTON BOOKS、二〇二〇)を発刊した。私の最高傑作である。

私が人生の最後に取り組むテーマが反移民の嵐が吹き荒れる世界の危機的状况を正常なかたちに戻すことだ。前記英語論文を理論的武器として世界各地で燃え上がる人道危機に立ち向かう決意である。

7 日本一の夢想家の夢

移民国家への道のりを振り返ると、二〇〇〇本を超える移民政策論文を公にしたが、

その努力が報われない日々が続いた。よく心身ともに健康で今日まで生きてこられたものだと思う。

一九七七年に「坂中論文」を発表するや批判が殺到したが、それに耐え抜いたことで強靱な精神力が身についたのだろう。同時に、タブーとされる問題に一人で立ち向かう負けじ魂の持ち主になったのだろう。

私は二〇〇五年四月、民間人としてのスタートを切るのにあたって、「法務省を退職後はボランティア活動として移民政策の研究に専念する」と妻子に伝えた。そのとき、それまで私の仕事を黙って見守ってくれた家族から、「お父さんはできもしない無謀なことばかりやっている」と言われた。身近で見ていると、実現不可能な夢を追いかけているように見えるのだろうか。

それは冷徹な官僚と呼ばれたリアリストの心にあるロマンチストの一面を衝いている。およそ天下国家のことに挑戦する人間には現実主義と理想主義の両面があるのだと思うが、私の体内にはドンキホーテ型の夢想家の血が大量に流れているのかもしれない。私の著作物の大半は、政策論文という性格上、ロマンチストの面とリアリストの面の二つが化学反応を起こして成立したものである。ロマンチストの目で一〇〇年先を展望

するユートピア計画を立てた。リアリストの目で現実を直視し、広い視点から当面する最重要課題の解決策を提示した。

学者の書く論文とくらべると、長期的かつ理想的なスタンスで問題の本質をとらえる傾向が強いと言えるのかもしれない。

私は信念を曲げない武骨者である。移民政策一本の直球で勝負した。日本の未来をつくるロマンを追い求めた。天の時を得て試合の流れを変える逆転満塁ホームランのような論文を発表する離れ業を演じることもあった。

この一〇年ほどは移民政策論文を書くのを日課とし、移民政策研究所のウェブサイト
に短文を投稿してきた。総計二〇〇〇本に及ぶ小論文がネット上を駆け巡った。一本一本の論文を積み上げた結果、その全体が巨大パワーとなって国民の移民拒否感情をくつがえした。坂中移民政策論の影響は深く広範囲に及び、時代を動かす勢いを増した。坂中英徳の個人的意見に過ぎなかった移民国家構想が日本の若者の心を奪ったのである。時代は、一八〜二九歳の若年層の約六〇％が移民政策に賛成という新しい局面に入った（二〇一七年三月二二日の日本経済新聞の「若年層の六割が賛成」）。

「移民政策はとらない」と公言する政府首脳も若い世代の間に盛り上がった移民賛成

の声には逆らえないから移民開国は時間の問題であると現下の情勢を認識する。少子高齢化時代を生きる若者が待ちこがれる移民国家への転換は歴史の必然である。移民開国で日本の若者の心を絶望から希望に変えれば岸田文雄首相は名宰相として日本の歴史に刻まれるだろう。

8 筆一本で移民国家の創建にいとむ

移民政策一本の行政経験を活かし、移民法の制定、移民協定の締結、移民政策基本会議の設置、入管法の改正、技能実習制度の廃止など移民法制のあり方を含む、直ちに移民国家への移行可能な具体策を提案している。人口秩序の崩壊という緊急事態に対処するための実践的移民政策だと自負している。

しかし、著作の形で発表した移民政策の提言は、役人をリタイアした二〇〇五年からコロナ禍の二〇二二年まで、日本の知的世界において論評の俎上に上ることはない。むしろ政治の争点に上ることもない。無力感にさいなまれる日々が続いている。

移民政策の厳冬時代、移民、移民と何年も言い続けた結果、奇跡が起きた。一七年前の国民のほぼ全員が移民政策に無関心の時代から、今日の移民受け入れに賛成が五一％（二〇一五年四月の朝日新聞の世論調査）へと、国民の多数が移民政策を評価する新局面を迎えた。

あと一步のところまできたと思うが、ここで満足して立ち止まってはならぬと肝に銘じている。政治の奮起を促すためにも、さらに上の世論形成を旨とす。ただ乗り越えるべきハードルは高いと感じる。総じて言えば国民は移民問題に無関心である。どうすればこの強固なる世論の壁を突き破り、政治が移民開国を決断せざるを得ないところまで移民賛成の世論を高めることができるか。

ひとえに移民政策のオピニオンリーダーたる私の責任である。移民の受け入れの必要性と緊急性について多数の国民の理解を得るため説明責任を尽くす。たとえば、日本の移民開国の世界的意義、世界で高まる日本の移民開国への期待、移民法制の具体的内容、移民政策と社会保障制度の関係などについて国民に繰り返し説明する。創作意欲が衰えていないのが救いである。これからも移民政策関係の論文を書き続ける。

本音を言うとは私は国民の七〇％が移民受け入れに賛成の世論を形成し、移民政策を支

持する国民の多数意見で政治を動かすという大望をいだいている。事柄の性格上、移民開国をめぐる議論は民族感情がからみ、国論を二分する激論や血が流れる抗争に発展することがままたる。だが排他的な民族感情が欧米諸国と比較して希薄な日本においては米国のように移民政策で国民の分断を招くことにはならないと見ている。

欧米の移民大国が移民の門戸を閉ざす方向にある中、日本政府が移民に好意的な国民世論を背景に移民開国を決断すれば、世界の人々は世界の人道危機に立ち向かう日本国民の快挙に拍手喝采で応えるだろう。日本が民主的手続きにより平和的に移民国家へ移行すれば、それは国民の大多数が移民立国で立ち上がった民主主義革命として世界の模範となるにちがいない。

9 人のやらないことばかりやった

五〇年の職業人生を振り返ると、人のやらないことばかりやってきたように思う。在日韓国・朝鮮人問題にはじまり、北朝鮮帰国者問題、興行入国者問題などである。現在

は移民国家の創建に挑んでいる。平安時代から続く移民鎖国という日本最強のタブーとの闘いである。

だれもが恐れを抱いてさわろうとしない問題と正面から向き合ってよかったと思う。私の独壇場であったから自作自演で心のまま演ずることができた。だれからも邪魔されることがなかったから白紙に国家百年の計の設計図を描くことができた。大願成就に至っていないものもあるが、総じていえばゴール近くまで来たと実感する。

無論いいことばかりだったというわけではない。問題の解決に当たって世論の支持を得ることができなかった。問題を発見し、政策提言を行ない、政策の実現につとめたが、大多数の国民は移民問題に無関心であった。それどころか極右の一部の人から猛烈な攻撃を受けた。孤立無援の闘いが終わったあとには悪戦苦闘したときの苦渋の思いだけが残った。問題を解決したという達成感を感じることはなかった。

どれもが難問中の難問であったから問題の解決までに気の遠くなるような年月がかかった。北朝鮮にいる日本人妻および北朝鮮残留日本人の救出は半世紀を得てようやく解決の糸口が見えてきた。移民国家日本の建設については一二〇〇年来の移民鎖国の呪縛が解かれて国民的議論が始まった。

さてこれから私は何をしようか。もう年だからやり残した二つの仕事に専念する。北朝鮮残留の日本人妻等の帰国問題と移民立国の問題に決着をつけるため残りの人生をかける。

10 大きな夢を描けば美しい花が咲く

「夢を描かなければ実は結ばない。大きな夢を描けば美しい花が咲く」。これは私の好きな言葉である。移民国家日本を創る大望を抱く私は、年をとるにつれて夢がどんどんふくらんでいった。そのため夢をつかまえるのがますます困難になった。それはいわば自分がまいた種だ。そんな私は至福の時を過ごしてきたと言えるのだろうか。実はそうとも言えないのだ。法務省退職後の一七年間、夢の重圧に押しつぶされそうになり、夢を追い求める人生にピリオドを打ちたいと思う時がしばしばあった。

ただし、この七年は打って変わって移民政策論文を精力的に書いている。悲壮な決意表明の最たる著作が二〇二二年三月に出た大作『移民国家日本は世界の頂点をめざす』

である。欧米の主要移民国家が移民・難民の入国の扉を閉じる方向にある中、日本のみならず世界の移民政策をリードする気概を持って筆を執った。身も心も完全燃焼し、人類共同体構想を柱とする移民国家の理想像を描き出した。

その結果、日本の若い世代の多くが移民の受け入れに賛意を表するところまで世論が動いた。世界の若者が反移民感情に走る中、誠意をもって移民を迎える用意がある日本の若者を誇らしく思う。心の広い若者たちが心一つにして挑戦する日本の将来は洋々たるものがある。地球市民的な感覚を身につけた若者が中心となって運営する移民国家日本が近く誕生するであろう。五〇年後の日本は移民国家の頂点に上り詰めているだろう。

今の私は移民国家への道の八分までの仕事をやり終えて心安らかな気持ちである。時代は移民国家に針路を取った。歴史の歯車は新国家の形成に向かつて動き出した。移民政策研究所所長が先頭に立って突っ走る時代は過ぎ去った。私のひとり旅は終わった。世界一の移民国家をつくるという残り二分の仕事は将来世代と政治家の責任で行なうていただきたい。

もう一つの私の夢である人類共同体社会の創造は、世界の恒久平和を願う人類の悲願

である。未来永劫、世界の若者がチャレンジするだろう。私の希望を言えば、唯一の戦争被爆国の日本の若者がその先頭を走ってほしい。

人類の全滅をもたらしかねない大量核兵器の存在が現実の脅威となる時代に入り、人類共同体の成否に全人類の生死がかかることになった。坂中英徳の夢物語の一言でそれを片付けるわけにはいかないのである。近い将来、それは人類社会全体が取り組むべき世界的課題に発展するであろう。

生物界で最も知恵があるとされる人類が、戦争の歴史から謙虚に学び、「人類は一つ」の原点に立ち返り、人類共同体社会を創る夢を現実のものにしていただきたい。

第三章

坂中英徳は人類の希望の星

1 目指すべきは核兵器のない世界

ロシアのウクライナ侵略など世界情勢が緊迫の度を増す中、移民政策で世界をリードする立場にある私が最優先で取り組むべき使命は何か。反移民勢力が勢いを増す世界の危機的状況を鎮めることだ。世界の識者が「ミスターイミグレーション」と命名する坂中英徳が先頭に立ち、世界各地で燃え上がる人道危機に立ち向かう。

反移民のキャンペーンを張ったトランプ大統領時代の米国。移民問題が主因でEUから離脱した英国。パリが二回のテロ攻撃を受け、自由・平等・博愛の精神が影を潜めつつあるフランス。ドイツのメルケル首相はEUの移民政策をリードしてきた偉大な政治家であるが、反移民の右翼政党が勢力を伸ばし、退陣を余儀なくされた。メルケル後のドイツはどこに向かうのだろうか。

二〇一九年三月、ニュージイルランドで痛ましい事件が起きた。オーストラリア人が五人のイスラム教徒を銃殺した。犯行声明の中で「白人社会に白人以外人間が入ってくるのは許さない」と言っていた。その男はイスラム教徒を狙い撃ちで殺害したからレイシズムの考えの持ち主である。

コロナウイルス問題の終息の目途が立たない時代、欧米の移民大国は常軌を逸した人種差別・宗教差別の方向に暴走しているかのように見える。このまま行ったら世界の移民政策はどうなるのか、移民政策の旗手を務める私は最近の世界情勢を深刻に受け止めている。

米国は独立宣言でアメリカに憧れて移住してくる人を歓迎すると約束した。それを国是としてきた。「アメリカは人種のるつぼ」とも言われてきた。しかし、二一世紀の今も白人至上主義者と黒人至上主義者とが死闘を繰り返している。米国社会の分断と黒人差別の根深さに驚きを禁じ得ない。さらには米中冷戦が激化の一途をたどる二〇二二年現在。全米で中国人差別が目立つ。世界各地で西洋人と中国人の激突の恐れさえあると憂慮している。

かつての私は第二次世界大戦後の人類は人種問題を克服したと見ていた。しかし、二一世紀の現在こそ「人種」と「レイシズム」の問題が噴出した時代であり、世界で頻発する人種差別の嵐を正視しなければならぬと考えを改めた。最近の私は人種差別の横行闊歩が人類の命取りにつながりかねないと恐怖心に襲われる時がある。

世界全体を見渡すと、人種や移民政策を理由とするヘイトクライムが続発している。

世界に漂う異様な雰囲気は、ヒットラーがヨーロッパを席卷した第二次世界大戦前夜の空気に似ているように感じる。欧米社会において自分たちの属する人種・民族・宗教が絶対的で正しいと考える人たちが増加する傾向にある。世界各地で異なる民族間・宗教間の紛争や内乱が頻発している。

二〇二二年現在の世界情勢を概観すると、人類は新型コロナウイルスの猛威に襲われている。世界各国は非常事態宣言を発している。人の出入国管理を強化し、国境を封鎖する異常事態が続いている。甚大な犠牲者を出した第二次世界大戦の深刻な反省に立つて人類が築いた国際法秩序の瓦解の日が近いと感じる。かてて加えてプーチンロシア大統領のウクライナ侵略が始まった。米国はロシアに対する経済制裁を強化している。世界経済が被る被害は甚大で、一九二九年の世界大恐慌以上の世界経済秩序の崩壊に発展する恐れがあると私は見ている。

今こそ全人類が心をついにし、人類運命共同体の理念を掲げて立ち上がるときだ。これは和の心と寛容の心が詰まった日本精神から生まれた世界平和哲学だ。ただし日本の感性の持ち主にしか理解できない難解な思想というわけではない。人種、民族、宗教を問わずすべての人々が容易に理解できる普遍的理念だ。

2 ホモサピエンスは地球上から姿を消す運命なのか

「人類の救世主」の名が世界に轟く坂中英徳は、人類が丸丸となって人類共同体社会を創る大望を抱き、一〇〇〇年後の実現をめざす。

ひとりの人間が一生の間に行えることは非常に限られている。日本人の中から坂中思想を引き継ぐ逸材が輩出すると信じ、命の尽きる日まで移民社会の理想像を追い求める。志を同じくする若者たちと夢を共有し、夢の実現に一步でも近づくため努力する。

夢は無限だ。ひとつの夢の実現はさらなる夢の通過点にすぎない。最近の私は、排外主義の考えが世界中に広まるのを阻止するため、世界のメディアと世界の知性の協力を得て、人類共同体哲学を世界の人々に向けて発信している。それが世界的課題にのぼる日は一〇〇年以上も先のことだと予想するが、人類共同体社会の理念が世界の良心の心をとらえる時代は意外と早く訪れるかもしれないと思う時がある。

すなわち西欧文明が主導してきた世界秩序の崩壊が一気に進み、世界全体が弱肉強食の動物世界に先祖返りし、かつ大量核兵器を使用する第三次世界大戦の勃発の危険性が切迫し、二一世紀前半中に人類共同体思想Ⅱ生命共同体思想が新しい世界秩序を支える

基本理念として脚光を浴びる時代がくるといふ考えが脳裏をよぎる時がある。それが人類社会の安寧秩序と人類の幸せにとつてどのような意味を持つものなのか、正直なところ私にはわからない。

以下において核戦争の勃発の可能性と人類共同体思想の關係に関する考察を進める。ホモ・サピエンスという一つの生物に属する人類は、民族や宗教の相違を克服し、恒久的平和体制を築くのだろうか。それとも民族・宗教・国家の覇権を争つて核戦争を繰り返し、地球上から姿を消す運命にあるのだろうか。

悠久の人類史をたどれば、異なる民族間の戦争の歴史であつたことは論をまたない。産業文明が成熟期を迎えた二一世紀の世界においても、核保有国が増える一方で、民族問題・宗教問題に原因する戦争やテロが絶えない。今日の世界は、北朝鮮とイランの核開発問題、プーチンロシア大統領の核戦争も辞さないという暴言、ロシアと米国の戦術核兵器の開発の動きなどに見られるように「いつ核戦争が起きてもおかしくない」と、世界の現状を深く憂えている。万一、宇宙空間も巻き込んだ地球規模の核戦争が勃発すれば、罪深い人間が滅亡するだけではない。人類の極悪非道の犯罪行為の巻き添えを食つて地球上の生きとし生きるものすべてが姿を消す。

ただし平和を願う心が人類のDNAにインプリントされていることも事実だ。「生物の世界の長を自認する人類が、地球上のすべての生物を皆殺しにする残虐行為を断じて行なってはならぬ」と、私は人類の良心に訴え続けている。私たち人類は、生物社会の一員として、人類以外の生命体の永遠の命にも思いをいたすべきだ。

万物の霊長の叡智で盤石の世界平和体制をつくる夢を抱く私は、世界の知識人の智慧を結集し、二二世紀中の実現へ向かつての第一歩を踏み出してほしいと切に希望する。人類共同体論と並んで生命共同体論を提唱する私は、人間の狂気で人類を含む動植物を全滅させてはならぬと深刻に考える地球市民のコモンセンスにいちずの希望を託す。

地球上で戦争が絶えない根本原因は、知恵がまわる人類の性さがというべき民族精神と宗教心が排他的な性格を帯びるものに変質し、それぞれの民族が文化・宗教における覇権を争って戦争を繰り返すことにある。人類に属するすべての人が民族と文化と宗教の多様性を尊重し、かつ、それらの相互関係を「人類は一つ」の普遍的理念と人類共同体精神の下で共存共栄するレベルにまで人類の道義心を高めない限り、戦争のない世界は永久に実現しないと、私は世界の良心に直訴する。

これほどまで核拡散が進むと、もはや何を言っても無駄な努力なのかもしれないと諦

めの境地に傾くときがある。米国、ロシア、中国の核兵器開発競争は宇宙空間へと広がり、もはや人間の知性と良心の力をもってしてはコントロールできない段階に達したのではないか。愚かなる人類は、核という文明の凶器を使って人間同士が殺し合う、自滅への道を歩み始めたのではないか。そのような恐怖の念に襲われる時がしばしばある。

そんな悪夢から目が覚めたとき、ロマンチストの一面がある私は、日本人が中心となつて究極の世界平和に挑戦する夢をいだき、今こそ人類史的課題に立ち上がる時だと奮い立つ。そのときには、「自由と博愛の西洋文明」と「寛容と平和の日本文明」とが合体して創成される新世界文明の時代に思いをはせる。そのいっぽうでリアリストの一面がある私は、仮に核戦争のない平和の時代が訪れるとしても、それは第三次世界大戦（核戦争）で億単位の人的犠牲を払った後のことではないかという恐ろしい考えが頭に浮かぶ。

ここで「万物平等思想」と「世界平和思想」を打ち立てた坂中英徳の発想の原点について触れておきたい。

『人類はあまねく平等である。万物はひとしく生きる権利がある』と考える日本人

は、動植物はもとより様々な民族や宗教と上手につきあうノウハウを身につけている。世界各地で燃え上がる民族問題・宗教問題を冷静かつ平和的に解決する能力を有している。

日本人は古来、人間はもとより動物、植物、鉱物など自然界に存在するあらゆる物と心を通わせ、自然と親しみ、そこに神がやどると信じている。自然と自己を同一視する万物平等思想（アニミズムの自然観）を抱いている。それは人類を含む万物の共生につながる自然哲学である。人類を永遠の存在に導く平和哲学である。万物の霊長の思い上がった考えを戒める日本人の叡智である」

3 人類共同体哲学の先駆者

二〇二二年七月現在の私は、人類共同体哲学のパイオニアの立場から世界の模範となる移民国家の建国を政府と国民にお願いしている。移民国家日本が世界の先頭を切って人類共同体国家として屹立する時代をみすえている。

移民国家の理想像を追い求めて千思万考につとめた私は、二〇一三年のある日突然、人類共同体思想のアイディアがひらめいた。

そして二〇一六年以降、移民・難民をめぐる世界情勢が暗転し、私が悠長に構えることは許されなくなった。人類共同体の創成を究極の目標に掲げる日本の移民国家ビジョンが、世界が直面する移民・難民問題を解決に導く世界的理念に発展する可能性が生まれたからだ。二〇二二年七月現在、アメリカ、フランス、ドイツ、イギリスなど代表的な移民国家で宗教差別と人種差別の考えが幅を利かせるようになり、地球規模での人類共同体社会の創造——すなわち人種・民族・宗教の違いを乗り越えて人類が一つになる世界の樹立を提唱する坂中ビジョンに世界の識者の関心が高まっている。

私は日本人ならではの発想に基づき日本オリジナルの移民政策を考案した。それが思いがけぬ好結果をもたらした。欧米諸国で排外主義勢力と反移民勢力が台頭したことからよって人類共同体思想の持つ正当性が証明されることになった。

人類共同体哲学を打ち立てた私は人類史上最大の重責を担う必要があると心に決めている。世界が未曾有の人道危機にある今こそ人類共同体の理念を世界の人々に訴える時であると考えている。

世界の移民大国が移民の扉を開かず方向に進む中、少子高齢化社会の到来で移民の受け入れが不可避となった日本が五〇年かけて一〇〇〇万人規模の移民を引き受けると国際社会に約束する時が来た。世界が移民氷河期に入った今のタイミングで内閣総理大臣が移民開国宣言を発すれば、日本列島は「移民のパラダイス」として世界の人々の希望の星になる。それは欧米諸国の移民政策に反省を促す強力なメッセージにもなる。

私の夢は年齢を重ねるとともに成長し、それに伴って責任も重くなる一方である。正直な気持ちを言えば、日本の移民政策が正念場を迎えた二〇二二年七月現在、世界の移民政策のあり方にまで口を出していいものかという後悔の念がないわけではない。だがこのふたつの仕事は密接不可分の関係にあるから同時に成し遂げる必要があるとの思いが募るいっぽうである。

世界の移民政策が混乱の極に達し、世界の移民政策のあるべき姿を提示することが世界的課題に急浮上したと認識している。世界の移民政策を正しい方向に導くため、日本および移民政策のオピニオンリーダーの立場にある私が人類共同体哲学で理論武装し、日本と世界の移民政策の根本的転換を迫る。

4 「和をもつて貴し」が日本の国柄

日本型移民国家のアイディアは、日本の豊饒な精神風土から生まれた日本独特のものである。

移民先発国の外国人処遇の歴史を概観すると、決して道理にかなったものばかりだったというわけではない。人種差別意識とイスラム教徒に対する恐怖心が国民の心にきざまれている欧米諸国においては移民の同化はあまり進んでいないようだ。それどころか反移民を主張する排外主義が勢力を強めている。高度文明を誇る欧米社会で起きている移民排斥運動に驚きを禁じ得ない。

私は既存の移民国家の歴史を反面教師とし、日本の国柄に合った移民国家の理念を打ち立てた。「万人は平等」と「人類は一つ」の日本思想を移民国家の基本理念とし、すべての人類が和の心で結ばれる共同体社会の樹立を国家目標にすえる。懐が深い人類共同体思想は世界最高レベルの移民国家理論に発展する可能性を秘めている。

人種、民族、宗教を問わずすべての人類に開かれた日本の移民革命思想は、白人至上主義とキリスト教という一神教の考えが根本にある西洋精神の対極をなすものだ。人間・

動物・植物のすべてに等しく神の存在を認める日本人の汎神論的世界観がその根底にある。

日本においては神道と仏教が平和共存（神仏習合）している。日本人の心の奥には文明社会では極めてユニークな宗教心、すなわち自然界に存在する万物を崇拜するアニミズム（精霊信仰）の世界がある。動植物の仏心を描いた伊藤若冲の絵をこよなく愛する民族である。

5 目指すべきは世界でいちばん移民に開かれた国

一〇年ほど前に西洋の知識人から「二〇〇〇年以上も移民鎖国を続けてきた日本人が今後五〇年間で一〇〇〇万人もの移民を受け入れることができるのか」という指摘があった。

だが、トランプ氏が米国大統領に就任した二〇一六年を境に移民政策をめぐる世界の空気が激変した。世界の中の日本の移民国家ビジョンの立つ位置にも大きな変化があっ

た。今の私は、米国、英国、フランス、ドイツなどで人種差別・移民排斥・反イスラム・反中国の動きが強まるなか、日本オリジナルの移民政策に基づく一〇〇〇万人の移民受け入れを政府に迫っている。同時に世界の知識人に向かって日本の移民国家ビジョンの持つ正当性と人類史的意義を強調している。確かな手応えを感じている。

英国、フランス、ドイツがさらなる移民を受け入れる余力を失いつつあるとともに、米国が反中国人に向かう状況は、日本が移民政策で世界に貢献するまたとない機会であると時代を認識する。一七八九年のフランス革命以後、世界の思想界に君臨してきた西洋文明の自由・平等・博愛の精神にかげりが見られる今日、私たちは人道精神で移民を温かく迎え入れるとともに新世界文明の創造の一翼を担おう。移民問題で西洋諸国の権威が地に落ちた状況を日本が移民国家として反転攻勢に転じるビッグチャンスととらえ、日本国民の底力を世界の人々にアピールしよう。

世界に類のない崇高な移民国家論を提唱しているだけでない。日本の国家目標として世界初の人類共同体社会の樹立を提案している。私たちは人種・民族・宗教・国籍の異なる人たちが人類同胞として共に生きる社会の実現をめざす。一〇〇年の歳月をかけて国の形を人類共同体社会に作り変える遠大な計画だ。

世界中の国々で人類共同体社会が形成される大望を抱く私の夢が尽きることはない。日本の精神文化の粋を集めた人類共同体思想が世界の人々の心を動かし、地球規模での人類共同体社会と世界平和体制が実現する時代を展望している。それは日本の移民政策が世界のモデルとなつて世界の移民政策の根本的変革を迫るものだ。

あたらしい未来を作る若い力の胎動を感じる坂中英徳移民政策研究所長から岸田文雄内閣総理大臣へのお願がある。異国の民に対する思いやりの心が豊かな若者に生きる希望を与えてほしい。令和時代を象徴する国の目標を「世界でいちばん移民に開かれた国」としていただきたい。若者世代はいたわりの心で移民を歓迎する。目指すべきは世界の若者が日本への移住を憧れる移民社会のユートピアの樹立である。

6 日本革命から世界革命へ

国家公務員を辞した二〇〇五年の春。新しい職が見つからなかった私はボランティア活動家として「人口崩壊に伴う国家非常事態を革命的な移民政策で乗り切る」という目

標を立てた。実務家が中心の欧米の移民政策の専門家とは目的意識も発想もスケールも異なる。移民政策にかける心意気でも温度差がある。私は退路を断つて移民立国に挑んだ。気がつくくと国の命運を双肩に担う立場になっていた。

それから一七年の月日が流れた。移民政策の理論構築に精進を重ねた結果、移民政策理論の深奥をきわめた人類共同体思想を世界の知識人に提案するところまできた。『JAPAN AS AN IMMIGRATION NATION』(LEXINGTON BOOKS、110110)である。

世界に類のない移民国家ビジョンを提唱しているだけでない。日本の国家目標として世界初の人類共同体社会の樹立を提案している。私たちは人種・民族・宗教・国籍の異なる人たちが人類同胞として共に生きる社会をめざす。一〇〇年の歳月をかけて国のかたちを人類共同体社会に作り変える壮大無比の国家ビジョンだ。

私の夢はとどまるところを知らない。世界中の国々で人類共同体社会が創生される夢を抱いている。日本の精神文化の粋を集めた人類共同体哲学が世界の人々の心をとらえ、地球規模での人類共同体社会と世界平和体制が実現する未来を展望している。移民国家日本が世界のモデル国となって世界の移民政策の根本的変革を迫る。移民排斥運動の高まりや反移民を唱える極右政党の台頭など人道主義の精神に著しく反する現代世界のあ

り方を根本から問いたです。

日本政府が独創的な移民国家ビジョンで世界の頂点をめざして歴史的第一歩を踏み出せば、移民国家日本の基本理念と根本規範は世界各国の模範になるはずだ。わけても国民の間に人種差別の感情と排他的な考えが厳然と存在する欧米諸国の移民政策に深刻な影響が及ぶと考えている。

移民立国の必要性について道理をつくして国民に説明し、誠意をこめて正論を語り、正義にかなう生き方を貫けば日本の未来が開けると信じて今日まで命をつないできた。世界の手本となる移民国家日本をつくる夢を持ち続けてきたからこそ令和の時代まで健全な精神を持って生きてこられたのだと思う。

五〇年間、国家的課題の最前線で奮闘した努力が報われた。世界最高峰の移民国家ビジョンの完成を見た。それが功を奏して移民鎖国という強固なる岩盤が崩壊した。賢明な国民が心をついにし、一人の犠牲者も出すことなく移民革命を成し遂げる可能性が視界に入った。日本国民がこれを見事に成就すれば日本史の輝く快挙となるだろう。

7 西洋文明の時代から日本文明の時代へ

トランプ米大統領政権が発足した二〇一六年という年は、移民問題に端を発して西洋文明の限界が明らかになるともに世界が激動の時代に入った年として世界史に刻まれることになる。これから新しい世界秩序の形成に向けた動きが活発化するだろう。その場合、もう一つの文明の旗頭である日本が新世界秩序をつくる重責を果たす必要があると私は考えている。

アメリカは代表的な移民国家で「人種のるつぼ」と称賛されてきたが、人種間の融和どころか、白人至上主義団体と黒人至上主義団体の対立・抗争が激しくなる一方だ。アメリカ社会の人種差別の根深さに驚きを禁じ得ない。

西欧文明の本質は、白人至上主義者と、キリスト教という一神教を信仰する人たちがつくった偏見ありの文明なのである。自分たちが信じる宗教が絶対で正しい。ほかの宗教はすべて邪教である。そういう独善的な考えが精神の根本にある。これまで経済と軍事の両面で非西洋諸国との圧倒的な差があり、移民の受け入れにも比較的寛容であった。ところが経済が行き詰まり、軍事面でも中国のパワーアップが顕著となり、

白人ファーストの西洋人の本性が現れたのである。常道に外れた反移民政策を実行したトランプ前米大統領は西洋社会の差別体質を体現する象徴的存在である。

世界各地で人種対立と宗教対立が激しくなるなか、日本文明は人種・宗教を理由に迫害されている人々のために何ができるのだろうか。

そもそも日本人の民族性は、人種・宗教の違いはたいした問題ではないと考えるものである。私たちは八百万やおよぼすの神々を信仰し、神道と仏教とキリスト教が平和共存している。自然との一体感を抱き、動植物にも仏心があると考ええる。白人と黒人との間に優劣はないと考えるのが大方の日本人である。

私が立てた移民政策には「人類は同類で一つ」という普遍的思考が原点にあって、それに和を尊ぶ日本精神を触媒として加えた人類共同体の世界観が組み込まれている。その点が欧米諸国の移民政策とは根本的に異なるところである。

日本が人類共同体哲学を基本理念とする日本型移民政策の旗を掲げて世界にアピールすれば、西洋人至上主義が国民精神の根本にある欧米の移民政策に対する有力な対抗軸になると認識している。

歴史をさかのぼると、西洋と日本では移民に対するスタンスが正反対のものであった

ことが直ちに明らかになる。

西欧における移民の歴史は、アフリカの黒人を奴隷として新大陸に強制的に移住させた原罪を背負っている。これは世界人権史に残る汚点である。そして現在の欧米諸国は移民の力を借りなければ経済と社会が成り立たない状況にある。

明治以後の日本が模範としてきたヨーロッパ文明、アメリカ文明とはいったい何だったのか。移民政策史に限って言えば、人の道と正義に著しく反するものであった。それに対して異なる民族に対する包容力が豊かな坂中英徳移民政策研究所所長が提唱する日本型移民政策は人道主義を旨とし、移民を人類同胞として温かく迎えるものである。

「全人類はみな同じ人間である。宗教や文化、皮膚の色の違いに関係なく、世界の人々を平等に受け入れる。日本国民は思いやりの心で移民を歓迎する」と、日本政府が国際社会と約束してはどうか。東洋の島国に誕生する移民国家日本が普遍的な移民政策の理念を前面に出して世界に打って出れば、それは異なる宗教に対する偏見と白人第一主義の考えが基本にある欧米の移民政策の退場を迫るものになるだろう。それが起爆剤となつて西洋文明の時代から日本文明の時代へと世界思潮の流れに変化が起きる可能性も十分考えられる。

8 私たちは人類同胞意識を有する地球市民をめざす

感度の鈍い日本の知的世界において人類共同体構想はいつもの例に漏れず言葉のほしにもものぼらない。未来志向の坂中移民政策論は日本が当面する問題にしか頭の及ばない学者やジャーナリストの想定外の代物なのだろ。他方、世界の知的世界においては「世界規模での人類共同体社会の創造」——つまり「人種・民族・宗教の違いを乗り越えて人類が一つになる地球共同体社会の樹立」を提唱する坂中ドクトリンに共鳴する知識人が増加傾向にある。私は人類共同体ビジョンの前途に確かな希望を抱いている。

公務員生活を終えた二〇〇五年四月。私は白豪主義に象徴される白人至上主義の考えが根強く残る欧米の移民政策の轍を踏んではならぬと心に誓った。同時に西洋の物まねでない日本オリジナルの移民政策理論の構築を目指した。以後、日本人の感性に訴える論文をひたすら書いてきた。そして二〇二〇年二月。人類共同体社会の創造という日本人の夢が詰まった移民国家ビジョンを世界の識者に紹介する地点まできた。

[Japan as an Immigration Nation: Demographic Change, Economic Necessity, and the Human Community Concept] (LEXINGTON BOOKS 110110) の発刊である。

この本の眼目のセオリーは副題の「the Human Community Concept」（人類共同体の概念）である。反移民の声の異常な高まりが見られる欧米社会が人類共同体社会の理念を機軸にすえる坂中ビジョンにどのような反応を示すのか興味がある。

先進国の中で唯一移民鎖国を続ける国の住人である坂中英徳がなぜ人類史に輝く理想を掲げて世界に打って出たのか。一〇〇年後の世界の姿を想像すると、「人類は平等で一つ」という人類像を抱く日本人は人類同胞意識を持つ地球市民に大化けし、人類共同体社会を創る可能性がある。いっぽう宗教と人種における優越的感情が本性としてある西洋人が人類共同体社会を創るのは至難の業である。そのためには西洋人の心に染みこんでいる優越的・排他的な民族性を拭い去る必要があるからだ。以上の洋の東西の精神風土の違いが私の脳裏に焼き付いている。

移民先発国の外国人処遇の歴史を概観すると、道理にかなったものではないことがすぐに見て取れる。人種差別意識とイスラム教徒に対する恐怖心が国民の心に刻まれている欧米諸国においては国民と移民の共生関係はあまり進んでいないようだ。それどころか高度文明を誇る欧米社会では移民排斥運動が活発化している。西欧文明に潜む西洋人ファーストの地金が露呈したのである。

私は既存の移民国家の歴史を反面教師とし、日本人の持つ普遍的な世界観が反映された移民国家の理念を打ち立てた。「万人は平等」と「人類は一つ」の日本的思考を移民国家日本の根本理念にすえ、全人類が和の心で共生する人類共同体社会の創成を究極の目標に掲げる。

その点が欧米諸国のナショナリズムの色彩が色濃く残る移民政策とは決定的に異なるところである。懐が深い日本の移民国家ビジョンは世界最高レベルの移民国家理論に上り詰める可能性を秘めている。

人種・民族・宗教に対する偏見が西洋人と比較してあまり見られない日本国民が世界の先頭を切って人類共同体社会を樹立するという私の信念は微動もしない。戦後の在日朝鮮人政策に見られるように、坂中論文の思想が色濃く反映された日本の移民政策は少数民族問題を円満解決に導いた偉大な実績を誇る。日本語という和の心が詰まった言語環境の下で育った移民の二世以下の世代は日本社会に自発的に溶け込むと自信を持って言える。様々な民族の心の一つにする同化力の強い日本語と融和力にすぐれた日本社会の特色に照らすと、近い将来、日本の移民政策が世界の移民政策の根本的変革を迫り、移民国家日本が世界のモデル国として君臨する時代が訪れるだろう。

あるいは移民が世界各地で躍動する百年先には、坂中理論の珠玉というべき人類共同体哲学が世界中で深い感動を呼んでいる可能性がある。

第四章

世界の評価が先行する

日本の移民政策

1 南カリフォルニア大学での講演

世界の評価と日本の評価の隔たりが大きい。日本の移民政策のことである。移民一〇〇〇万人構想について世界の知識人は高く評価する。しかし日本ではさっぱりである。議論の対象にすらならない。日本の知識人は時代を見る目も人を見る目もないのだろう。そのような状況が一七年間も続いている。しかし近くそれも解消されるだろう。世界の評価に日本の評価が追隨する形でおさまるだろう。日本の近現代史においてよく見られる知識人の転向である。

二〇一三年九月、南カリフォルニア大学日本宗教・文化研究センターのダンカン・ウィリアムズ所長から、二〇一四年四月、「ハイブリッドジャパン」講演シリーズの一環として、「日本の未来と日本の移民政策」のテーマで基調講演をするよう依頼があった。あわせて世界の移民政策の研究者が集まる「日本の移民政策と社会統合に関するシンポジウム」への参加要請があった。なお、私の前に作家の村上春樹氏と映画監督の宮崎駿氏が講演されたということである。

ダンカン・ウィリアムズ南カリフォルニア大学准教授（当時）は、二〇一三年末、講

演の打ち合わせで来日の折、「移民国家日本」の未来像を描いた私の著作を「真の移民国家ビジョンを打ち出したもの」「日本の伝統的精神風土から生まれたもの」と評価した。ちなみに同准教授は母親が日本人で日本仏教の研究者である。「ダンカン」という名は日本名である。

同年六月、A P通信社のマルコム・フォスター東京支局長から「坂中さんは日本を元氣な国にしたいのですね。応援します」という励ましの言葉をいただいた。彼は宣教師の子として北海道で生まれた親日家である。日本の精神風土に根差した移民政策を推進することで意気投合した。

二〇一四年三月、世界の投資家の対日投資行動に影響力を有する米国最大の投資顧問会社の幹部たちと会い、移民一〇〇〇万人構想について説明した。別れ際に彼らは「坂中さんの移民国家構想の早期実現を期待します」と述べた。

私が会った世界の知識人、ジャーナリスト、経済人たちは、日本が直面する人口問題の重大性とその根本的解決策としての移民政策の必要性を理解し、私が主張する移民政策の理解者である。

坂中移民政策論に対する外国人の好意的な評価と激励がなかったならば、私が移民国

家日本の建設に執念を燃やしてここまでやれたかどうかは疑問である。四面楚歌の状況下で移民鎖国の厚い壁と闘う気力が失せ、今の私はなかったかもしれない。

日本が大好きな外国人たちは日本の未来のことについて日本人以上に心配している。一期一会の思い出がたまった海外の友人たちとの感動の出会いが私の生涯の宝である。

27 救世主 (The Domsday Doctor)

私の移民国家ビジョンを真つ先に評価し、世界に発信したのは外国人ジャーナリストたちであった。自信を持って正しい道を歩むよう背中を押してくれた。国内の知識人から完全に無視される状況が続く中、ワシントン・ポスト紙、エコノミスト誌など世界を代表するメディアの評価がどれほど心の支えになったことか。

「移民革命の先導者」「ミスターイミグレーション」「移民政策のエキスパート」などの形容詞付きで坂中英徳移民政策研究所長の名前が世界に広まった。

世界のジャーナリズムが大きな紙面を割いて坂中移民政策理論のエッセンスを報道す

るといふ破格の扱いを受けて、人口崩壊の脅威が迫る日本を移民政策で救う立場にあることを思い知らされた。また、世界の知性が日本の移民開国を待ち望んでいることが痛いほどわかった。

その嚆矢となった画期的な文章を紹介する。一〇〇六年三月のジャパンタイムズに載った「The Domsday Doctor」（救世主）という見出しの評論である。まず、その「救世主」という恐れ多い表題に驚いた。それを見て日本存亡の危機を救う責任の重さに身の縮む思いがした。その日から救世主という重い十字架を背負って生きてきた。

この論文を書いたのは英国の『ザ・インディペンデント』東京特派員のデイビット・マックニールさん。日本外国特派員協会の重鎮は一四年後の今も坂中移民政策論の展開を温かく見守ってくれている。

「坂中は最近、少子高齢化による地域社会の崩壊の危機と、牢固とした低い出生率（二〇〇四年の出生率は一・二八に低下）に警鐘を鳴らし、官僚の殻を破って『五〇年間で二〇〇〇万人の移民受け入れ』を示唆した。

坂中は『入管戦記』という著書で、慎重に言葉を選び、かつユートピア物語と断つ

ているが、『日本は多民族社会になり、アジア全域から移民をひきつける国にならなければならない』と初めて提案した人だ」

3 「移民革命の先導者」(ジャパントイズム)

二〇一二年一〇月二二日の『ジャパントイズム』に「移民が日本を救う」という見出しの記事が載った。サブタイトルは「新しい日本文明は、世界の民族が成し得なかった多民族共同体を実現し、世界文明のひとつの極として屹立するだろう」(坂中英徳著『日本型移民国家への道』)である。結びは「革命家とは、いつか自分たちの時代がくるという強い信念を持って生きていく人たちのだろう」である。

この記事を書いたのは、在日歴三五年の知日家のアメリカ人である。私の論文『日本型移民国家への道』(東信堂、二〇一一年)と『人口崩壊と移民革命』(日本加除出版、二〇一二年)を精読し、私のことを「移民革命の先導者」と呼び、私が提唱する移民国家構想を内外に紹介した。

〈革命家の顔…元法務官僚、元東京入国管理局長の坂中英徳は、日本が崩壊寸前であることを危惧し、「二〇五〇年までに一〇〇〇万人の移民を受け入れなければならない」と述べる。〉

〈深刻な人口危機の時代に生きる日本人は、もはや日本人だけの世界に閉じこもって安穩に暮らすことはできないと肝に銘じるべきだ。日本は、移民と共に生きる世界を築き、「移民歓迎」の旗を掲げるしか生き延びる道はない。〉

〈人口減少期に入った日本は明治維新（一八六八年）に始まった近代化・西洋化の革命）に匹敵する大改革を迫られる。日本人の生き方、国民の民族的構成、社会経済制度などを根本から見直し、新しい国を建設しなければならない。日本の移民国家としての復活は、究極の日本改革であり、日本が直面しているあらゆる問題を解決する万能薬なのである。〉

これが日本を代表する英字紙に掲載されると、日本発の移民革命思想は世界の知識人に衝撃が走った。『ジャパンタイムズ』によると、世界の読者から大きな反響があったということである。

移民政策研究所にも「今日、坂中さんの移民国家という考えを説明した記事を読んで、とても感動しました。初めて日本の方からそういう考えを聞きました。坂中さんは新しい日本の元祖になってください」（在日経験のあるアメリカ人）など、日本の移民革命に期待するメールが届いた。

私のような保守思想の持ち主がどうして「革命家」と命名されることになったのか。日本国の危急存亡の時に移民政策の立案をライフワークとする日本人が居合わせ、人口崩壊の迫る日本を救う移民国家の理念を掲げて登場したということである。人口崩壊の危機の「時代」が移民政策の専門家を緊急に必要としたということである。

この記事に接した私は「移民革命家」に指名されたことを誇りとし、移民革命の先導者の責任を全うすることを誓った。

4 「人口危機をロボットが救う？」（ワシントン・ポスト）

二〇〇五年は日本の歴史的転換の年であった。政府予測では、日本の人口は二〇〇七年から減少へ転ずるとされていたのだが、実際は二〇〇五年から減りはじめたのだ。明治時代からほぼ一貫して増え続け、日本の経済と社会の発展を支えてきた人口が減少局面に入ったのである。それも五〇年後の人口は三分の二に落ち込み、百年後は明治初期の四〇〇〇万人台の人口にまで減るといふ。二〇〇八年一月七日の「ワシントン・ポスト」に「人口危機をロボットが救う？——労働人口が減少する日本は移民を拒み、テクノロジーに頼る」という長文の記事が載った。人口危機に向かって進んでいる日本が選ぶのは日本人の好きなロボットであって苦手な外国人ではないだろうと、日本の姿勢を皮肉ったものだ。

ワシントン・ポストのブレイン・ハーデン東アジア総局長（当時）は、「日本政府は高齢化社会を救済するためサービス用ロボットの開発に多額の補助金を出している。本来は移民の受け入れを検討すべきだが、これは厄介な問題だから避けているのだ。政治や企業のリーダーたちは、その場しのぎの弁解のためロボットを前面に押し出している」

と書いた。私はワシントン・ポストのインタビューに応じ、以下のように述べた。

（ロボットは有益であるが、人口減少問題の根本的な解決にならない。日本政府は、移民を受け入れ、教育し、支援するという、もつとまっとうなことに金を使ったほうがよい。日本が経済大国の地位を維持しようというのであれば、ロボットではなく人間が必要である。それも今すぐ海外から人間を受け入れなければならぬ。これから五〇年間で少なくとも一〇〇〇万人の移民を受け入れる以外、日本にとって合理的な選択肢はない。政治家は移民受け入れ問題に取り組まない。票に結びつかないからだ。政治家こそが日本の未来について考えるべきであるのに。）

「二〇〇〇万人の移民受け入れ」について、ワシントン・ポスト紙は、「坂中氏の提案を実現するのは難事業だ。もともと日本人は外国人が嫌いだし、外国人人口の割合はたったの一・六％である。坂中氏の移民受け入れ提案は、現時点では、政治指導者たちの支持を得ていない」とコメントした。

同記事によると、トヨタのロボット開発の責任者が、「私たちの狙いは、高齢者の外

出をロボットが手助けすることである。もしマシンが存分に機能し、買い求めやすい価格になれば、将来の日本では一家に一台のロボットの相棒がいる生活が現実のものとなるだろう」と語り、「あなたは外国人を家庭に入れますか、それともロボットを所有しますか」と問いかけた、ということだ。

ワシントン・ポストの記者は次の言葉でリポートを結んだ。「日本ではロボットが好まれていくようだ」。

5 「移民政策のエキスパート」(ワシントン・ポスト)

二〇〇九年一月二三日の「ワシントン・ポスト」の一面に「失業した移民の就職支援を推進する日本——人口減少への危機感が新しい施策を生み出した」という見出しの記事が載った。二〇〇八年九月一五日のリーマン・ショックに端を発する世界同時不況が深刻化する中、日本政府が「定住外国人施策推進室」を設置して実施している外国人政策は革命的である、と世界に発信したものだ。そこに私の発言が紹介されている。

〈失業した外国人が日本にとどまれるよう支援する政府の取り組みは『革命的』なものである。日本は長年、外国人の定住を拒んできた。仕事を失った外国人は母国に帰ってもらおうというのが、日本政府がこれまでとってきた一般的な立場である。今回の新しい政策だけで日本が移民国家へ舵を切ったとまでは言えないが、将来日本の歴史を振り返るとき、これが移民国家への転換点だったことがわかるだろう。〉

〈今回の政府の決定は、世界中の移民希望者に対する魅力的なメッセージになるだろう。仕事を求めて日本に来た移民は、深刻な不況の時でさえも、状況に配慮した適正な処遇が受けられるからだ。〉

〈日本はようやく日本語を話せない移民を受け入れるための体制が整っていないことに気がついた。〉

遅きに失したのは確かだが、政府が移民の受け入れ態勢の不備を直視するようになったのは重要だ。〉

米国を代表するクオリティペーパーの一面に掲載されたので、就任早々の当時のオバマ米大統領も読まれたはずで「日本は移民に暖かい国」との印象を持たれたのではないか。オバマ氏は移民の子であるから日本の取り組みを評価されたと思像する。また、日米関係に好影響が及んだと思われる。

このたびのワシントン・ポストの記事は私の「移民開国論」を後押しするものであった。私のことを「移民政策のエキスパート」と紹介し、「育成型移民政策」を世界の知識人の間に広めてくれた。

二〇〇八年のワシントン・ポスト紙の『ロボットが人口危機の日本を救う?』は「坂中氏の一〇〇〇万人の移民受け入れ提案は政治指導者たちの支持を得ていない」と述べた。しかし二〇〇九年のリポートは次のように書いた。

「世界で二番目に大きい日本経済を失墜させる深刻な人口危機を食い止める方法は、大規模な移民の受け入れしかない。そのような認識が、最近、日本の政治家や産業界のリーダーの間で広まっている。二〇〇七年夏、与党の自由民主党の約八〇人か

らなる政治家グループは、今後五〇年間で一〇〇〇万人の移民を受け入れる必要があると提言した。また、移民を「受け入れる」というだけでなく、移民とその家族に日本語教育や職業訓練を行い、国籍を促す政策、つまり日本人を「養成」する移民政策を提言した。〕

ワシントン・ポストのこの二つの記事から、二〇〇七年から二〇〇八年にかけての一年間で、日本の移民政策をめぐる状況に大きな変化があったことがわかる。

二〇一〇年二月、ワシントン・ポスト紙のリー・ホックスタッター論説委員が、「日本の移民受け入れに対する姿勢、態度の変化」のテーマで取材を行うため来日し、私を訪ねてきた。同紙の取材を受けるのは二〇〇七年一月と二〇〇九年一月に続いてこれが三度目である。ワシントン・ポストが日本の移民政策に寄せる関心は並々ならぬものがある。

彼は私の英文図書『Towards a Japanese-style Immigration Nation』（移民政策研究所、二〇〇九年）を熟読しており、中身の濃い議論ができた。約二時間の取材が終わって意気投合した。「人口危機が迫る日本を救う道は大胆な移民政策をとることである」

という考えで一致した。私が見送ったとき、彼は「Lonely Battle ぶすね」と言つて堅い握手をした。

ワシントン・ポストの一連の取材と報道を通して、私は米国政府が日本の移民開国を待望していると理解した。アメリカの代表的なクオリティペーパーが米国政府の意向に添う形で日本の移民政策の動向を追いかけているのだと思つた。

アメリカ政府は、アジアで最も信頼する同盟国の日本が、人口危機に対して適切な手を打たず、国際社会でその存在感を急速に失つていくのは、アメリカのアジア戦略上好ましくないと考えているのではないか。いやもつとポジティブに、日本がアメリカと国家理念を共有する移民国家の仲間入りをし、日米の同盟関係が一層深化することに期待を寄せているのではないか。当時、そのように私は理解した。

その後も、ワシントン・ポスト、ニューヨークタイムズ、ウォール・ストリート・ジャーナル、AP通信、CNNテレビなど米国の有力メディアの私に対する取材が絶えないことから判断すると、二〇一〇年の時点での私の見解は当を得たものであつたと思つている。

6 ウオール・ストリート・ジャーナルの日本革命論

二〇一一年六月一五日のウオール・ストリート・ジャーナル（アジア版）のオピニオン欄に私は「移民政策が日本を元気にする」（An Immigration Stimulus for Japan）という題の小論文を発表した。そのエッセンスは以下のとおりである。

（日本が崩壊を免れる唯一の対応策は、国民が『移民』を歓迎することである。私は、人口崩壊の悪影響を最小限におさえるため、日本は五〇年間で一〇〇〇万人の移民を受け入れる必要があると主張している。これだけの規模の移民を入れると、衣食住、教育、雇用、金融、観光、情報などの分野で新たな市場と需要が創出され、少なくとも移民人口分の経済成長が見込まれる。）

すると、翌週の六月二二日のウオール・ストリート・ジャーナル（アジア版）の社説に「日本再興の新政策」（A New Plan for Japan）というタイトルの論説が載った。

（まさに今、誰かが日本革命の道を示し、それを断行しなければ、日本全体が悲劇に見舞われる。日本人口の高齢化に伴い、日本政府の経費を支える国家財政が破綻する——過去に貯蓄に励んだ国民は国債の購入をやめ、代わりに年金生活のため貯蓄を取り崩す。）

（先週の本欄で坂中英徳が指摘したように、生産年齢人口の減少が革命的な移民政策を迫る新たな圧力になるだろう。外国人政策の改革も必要である。特に、出稼ぎ労働者ではなく、永住外国人を迎える移民政策への転換が不可欠だ。）

（政府が改革を先送りすればするほど、厳しい選択肢を避けることはいよいよ困難になる。日本は過去において明治維新であれ第二次世界大戦後の復興であれ、痛みを伴う変化を乗り越えて発展してきた。正しい見識を持つリーダーが現れ、正しい改革を行なえば、日本はかつての栄光を取り戻すだろう。）

私の小論とウォール・ストリート・ジャーナルの社説は、人口崩壊を契機に社会経済

制度の瓦解が始まる日本を救うのは「移民」という点で見解を同じくした。日本再興は移民政策の展開にかかっているという認識でも一致した。

米国および世界の政治と経済に多大の影響力を有するウォール・ストリート・ジャーナル紙が、坂中英徳の移民政策論を革命的と評価したことの持つ意義は大きいと思った。同紙から「日本の革命家」に指名され、後に引けない立場にあることを思い知った。

第五章

被爆国日本は

核戦争を絶対許さない

1 天職を独り占めする職業人生

二〇〇五年八月。日本が空前の人口減少期に入ることが明らかになるや、移民の受け入れが喫緊の国民的課題になると考えた私は、人口減少社会における移民政策に関する提言作りを目ざし、民間の研究機関・「外国人政策研究所」を創立した。さらに二〇〇九年四月、その組織体制を拡充した「一般社団法人移民政策研究所」を設立した。

移民政策研究所 (Japan Immigration Policy Institute) は、移民に対する不当な差別または偏見の防止および根絶を図り、もって日本型多民族共生社会を創ることを目的として結成された一般社団法人である。この法人の抱く夢は途方もなく大きいが、その研究体制は極めて脆弱である。坂中英徳以外にスタッフも研究員もない。自宅が事務所を兼ねる。この組織は坂中の死とともに消滅する運命にある。

自分の能力の百倍の能力を必要とする大業と死闘を繰り広げていることは百も承知だ。人の数倍の努力を続けなければ歴史的偉業の入り口まで到達できるかもしれないという一縷の望みに残りの人生をかけようと思った。さいわい移民政策の分野は私の独り舞台に終始した。自作自演で心のままに演じることができた。白紙に好きな絵を好きなよう

に描いた。

「国の命運がかかる国家の一大事に単身で乗り出し、「世界の中の日本」のあるべき姿を追い求めてきた。私の仕事をあたたかく見守ってくれた家族から「できもしない夢ばかり追いかけている」と言われたが、私は日本一の夢想家なのかもしれない。移民政策のことしか頭にない私は、移民社会の理想郷を創るため四六時中頭を回転させている。

話が脱線した。本題に戻る。移民政策研究所所長の一七年の歩みを回想すると、規模雄大な移民国家ビジョンを打ち出した著作が国民からも知的世界からも政治家からも無視される状況が続く中、日本の新しい未来をつくる責任を全うできるか一人で悩み、なにもかもほうり投げたい気持ちに落ち込む時があった。するとすぐに、人口崩壊の脅威にさらされている日本を救うため移民立国の旗を死守しなければならぬと思ひ直した。その繰り返し連続の時代が続いた。

なぜか二〇一三年の春に心境の変化が起きた。そうなった理由はわからない。「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」の古武士の犠牲的精神に憧れる私の地金が出たのかもしれない。いずれにせよ日本の新しい歴史を創るのは自分に課せられた任務という気持ちになった。自分以外に誰がやるのかという使命感が生まれた。

二〇二二年の私は、移民国家の創始者の天職を授かった運命を受け入れ、一〇〇年先の世界のあるべき姿を視野に入れ、日本の精神文化の粹を集めた移民国家の青写真の作成に全力投球している。単刀直入に問題の核心を突く文章スタイルが身についた。二〇二二年の上半期に五冊の力作を発刊した。

最近にわか一般社団法人移民政策研究所が内外の耳目を集めるようになった。大きな研究所と思っている方もおられるかもしれない。しかし、その実体はというと、前述のとおり研究所とは名ばかりの、言ってみれば坂中英徳の個人商店のようなものだ。いっつぶれてもおかしくない小さな団体である。

二〇〇五年に役人を辞めたとき、組織を企業し発展させる能力も人徳もない私は筆一本で勝負するしかないと思いついた。好きなことをやり、嫌いなことはやらないと心に決め、大好きな論文の執筆に専念した。それが脳みその活性化と、日本の移民政策を先導する論文の大量生産につながった。いつのまにか国の運命を背負って立つ立場になっていた。

以下は、一九七七年から二〇二二年までの四五年間に発刊した著作一覧である。論文を書くのが本職になった私は六〇冊ほどの本を書いた。よくこれだけの数の著作をあら

わしたものだと感じる。

いずれの本も渾身の力をこめて書いた。練りに練った文体を模索した。その気宇雄大なタイトルを見て、国の重要政策に関わる論文の完成に一言半句もゆるがせずに文章を綴った往時の思いがこみあげてきた。

ひとつひとつの論文の創作に全精神を投入した。これらの作品を完成させるのに生みの苦しみを味わった。すべて自分の頭から絞り出した思想である。西洋の借り物の思想は一つもない。内容的にも質的充実に努めた。移民国家構想の骨格部分が変わらないが、人類共同体論、日本革命論など歴史を動かす政策提言が新たに加わり、問題意識も世界の移民政策のあり方にまで広がり、思想も深化し、創造性と普遍性に優れた理論に発展したと思っている。レベルの高い論文を積み上げた実績に照らして考えると、政策論文や法律書を書く天分にめぐまれたと言えるのかもしれない。

なお、移民政策研究所から出した三六冊の私家本は、中身は大手の出版社から出たものとそん色はないが、一〇〇人ほどの友人以外に読者はいない。世間にその存在すら知られていない無名の著作群が世の中の一隅を照らすことができれば望外の喜びである。

一〇〇年後の歴史家は「筆一本で日本と世界の移民政策を動かした」と記述するだろう。

2 坂中英徳著作集

- (1) 『今後の出入国管理行政のあり方について』（自費出版、一九七七年）
- (2) 『今後の出入国管理行政のあり方について——坂中論文の複製と主要論評』（日本加除出版、一九八九年）
- (3) 『改正入管法の解説——新しい出入国管理制度』（共著、日本加除出版、一九九一年）
- (4) 『出入国管理及び難民認定法逐条解説』（共著、日本加除出版、一九九四年）
- (5) 『国際人流の展開』（日本加除出版、一九九六年）
- (6) 『出入国管理及び難民認定法逐条解説新版』（共著、日本加除出版、一九九七年）
- (7) 『在日韓国・朝鮮人政策論の展開』（日本加除出版、一九九九年）
- (8) 『出入国管理及び難民認定法逐条解説全訂版』（共著、日本加除出版、二〇〇〇年）
- (9) 『日本の外国人政策の構想』（日本加除出版、二〇〇一年）
- (10) 『外国人に夢を与える社会を作る——縮小してゆく日本の外国人政策』（日本僑報社、二〇〇四年）
- (11) 『入管戦記——「在日」差別、「日系人」問題、外国人犯罪と、日本の近未来』（講談社、

- 二〇〇五年)
- (12) 『脱北帰国者支援は私の使命』(脱北帰国者支援機構、二〇〇五年)
- (13) 『出入国管理及び難民認定法逐条解説改定第三版』(共著、日本加除出版、二〇〇七年)
- (14) 『移民国家ニッポン——一〇〇〇万人の移民が日本を救う』(共著、日本加除出版、二〇〇七年)
- (15) 『日本型移民国家の構想』(移民政策研究所、二〇〇九年)
- (16) 『Towards a Japanese-style Immigration Nation』(移民政策研究所、二〇〇九年)
- (17) 『北朝鮮帰国者問題の歴史と課題』(共著、新幹社、二〇〇九年)
- (18) 『日本型移民国家の理念』(移民政策研究所、二〇一〇年)
- (19) 『日本型移民国家への道』(東信堂、二〇一一年)
- (20) 『人口崩壊と移民革命——坂中英徳の移民国家宣言』(日本加除出版、二〇一二年)
- (21) 『全訂出入国管理及び難民認定法逐条解説』(共著、日本加除出版、二〇一二年)
- (22) 『日本型移民国家への道』(東信堂、増補版、二〇一三年)
- (23) 『日本型移民国家への道』(東信堂、新版、二〇一四年)

- (24) 『Japan as a Nation for Immigrants』(移民政策研究所、二〇一五年)
- (25) 『日本型移民国家の創造』(東信堂、二〇一六年)
- (26) 『私家版 日本型移民国家が世界を変える』(移民政策研究所、二〇一六年)
- (27) 『私家版 東京五輪の前に移民国家体制を確立したい』(移民政策研究所、二〇一六年)
- (28) 『私家版 日本の移民政策の展望』(移民政策研究所、二〇一七年)
- (29) 『私家版 坂中移民政策論集成』(移民政策研究所、二〇一七年)
- (30) 『私家版 移民国家の歴史を記録するのは私の使命』(移民政策研究所、二〇一七年)
- (31) 『日本型移民国家の世界的展開』(移民政策研究所、二〇一八年)
- (32) 『日本の移民国家ビジョン』(移民政策研究所、二〇一八年)
- (33) 『坂中英徳の移民政策案内』(移民政策研究所、二〇一九年)
- (34) 『日本型移民政策論集成』(移民政策研究所、二〇一九年)
- (35) 『坂中英徳・在日朝鮮人政策を語る』(移民政策研究所、二〇一九年)
- (36) 『新しい入管行政のあり方』(講演録)(移民政策研究所、二〇一九年)
- (37) 『人類共同体社会』とは』(移民政策研究所、二〇一九年)
- (38) 『移民国家ニッポン』の未来図』(移民政策研究所、二〇一九年)

- (39) 『JAPAN AS AN IMMIGRATION NATION』(LEXINGTON BOOKS、110110年)
- (40) 『坂中英徳 マイ・ストーリー』(移民政策研究所、二〇二〇年)
- (41) 『一刻も早く移民開国宣言を』(移民政策研究所、二〇二〇年)
- (42) 『移民と共に歩んだ五〇年』(移民政策研究所、二〇二〇年)
- (43) 『人類共同体宣言が世界の人道危機を救う』(移民政策研究所、二〇二〇年)
- (44) 『移民国家日本が世界を変える』(移民政策研究所、二〇二〇年)
- (45) 『移民国家日本は世界の未来を照らす』(移民政策研究所、二〇二一年)
- (46) 『人類共同体哲学入門』(移民政策研究所、二〇二一年)
- (47) 『坂中英徳移民政策論文集』(移民政策研究所、二〇二一年)
- (48) 『人類共同体論の世界展開』(移民政策研究所、二〇二一年)
- (49) 『増補版 坂中英徳・在日朝鮮人政策を語る』(移民政策研究所、二〇二一年)
- (50) 『移民社会の理想像を求めて』(移民政策研究所、二〇二一年)
- (51) 『移民政策百科事典』(移民政策研究所、二〇二一年)
- (52) 『日本移民政策史』(移民政策研究所、二〇二一年)
- (53) 『移民国家日本は世界の頂点をめざす』(移民政策研究所、二〇二二年)

- (54) 『新版 移民社会の理想像を求めて』（移民政策研究所、二〇二二年）
- (55) 『核戦争時代の人道危機を救うのは私の使命』（移民政策研究所、二〇二二年）
- (56) 『世界に冠たる人道移民大国が出現した』（移民政策研究所、二〇二二年）
- (57) 『人道移民大国の道』（移民政策研究所、二〇二二年）
- (58) 『人類の救世主が立ち上がるとき』（移民政策研究所、二〇二二年）
- (59) 『坂中全集は人類の希望の星』（移民政策研究所、二〇二二年）
- (60) 『被爆国日本は核戦争を絶対許さない』（移民政策研究所、二〇二二年）

3 移民法制——移民法・移民庁・移民協定・人類共同体宣言

日本の移民受け入れ制度の大枠を定める基本法として「移民法」を制定する必要がある。日本の移民政策の基本理念として、公平・公正の立場から世界の多様な国籍の人々を幅広く受け入れ、世界各国との友好親善関係を深めるとともに、世界平和に貢献することを規定する。とくに、国籍・民族・人種・宗教の異なる人々が日本で平和的に共存

する「人類共同体社会」の実現を国家目標とする旨を移民法の条文でうたいあげれば、世界各国の模範となる歴史的な「人類共同体宣言」に発展するであろう。

移民受け入れ基本計画の策定については、まず、内閣総理大臣を議長とする移民基本政策会議を内閣に置き、年間の移民受入数、移民の入国を認める産業分野並びに地方自治体、年間の国籍別移民受け入れ枠の決定などの基本方針について審議すること。つぎに、内閣に移民政策担当の閣僚を置き、移民基本政策会議の事務局として「移民庁」を設置する。移民庁は内閣総理大臣の移民受け入れ計画の企画・立案を補佐する。そして、関係府省は、国会で承認された移民受け入れ計画に基づいて移民政策を実施する。国会の承認を求めるのは、政治家、国民の合意の上で移民政策を公明正大に進めるためである。

加えて、「移民法」において世界各国からバランスよく公平に受け入れることを移民政策の基本にすえ、国別の量的規制を行なう根拠規定を設ける必要がある。とりわけ、多数の友好国との間で「移民協定」を締結することが重要である。

政府は、移民法の規定に基づき、人材需給の逼迫状況や受け入れ体制の整備状況、移民の社会適応の進捗状況、移民協定の履行状況に加え、日本を取り巻く国際環境や移民

政策に寄せられる国民の意見などを総合的に勘案して、年次計画を立てて移民政策を円滑に進める。その場合、地方の人材需給の実情に詳しい都道府県知事の意見を尊重する。

また、国籍法を改正し、先進国の例にならない、二重国籍を認めること、並びに移民二世・三世に最も安定した法的地位（国民）で生活してもらうため、永住者の子として日本で生まれた外国人が出生の時に日本国籍を取得できる手続きを定めることを真剣に検討する。

ちなみに日本と同じ血統主義の国のフランスは、移民の子として出生した人、すなわち移民二世に対してフランス国籍を認めている。ドイツも、血統主義の例外として移民の子の子（移民の三世代目）にドイツ国籍を与えている。

4 坂中英徳は移民国家日本の象徴的存在

六〇冊ほどの移民政策関係の本を発行した実績が物を言っていて私は移民国家ジャパンの象徴的な存在になるだろう。特に英文著作『JAPAN AS AN IMMIGRATION NATION』は類書

がないから「移民政策理論の金字塔」と、世界の代表的知性から絶賛される可能性がある。しかし業績が評価される時代は、批判と罵倒の集中攻撃を浴びた私にとって人物評価が百八十度も転換する未知の世界だ。歴史的な業績を残した人間の晩年が恥ずべきものになる例は枚挙のいとまがない。「晩節を汚す人間になってはならぬ」と肝に銘じている。最近の私はどのように生きれば人倫にかなう形で最期を迎えられるかについて真剣に研究している。これからも坂中論文の著者の名にふさわしい論文を書くこと、論文が書けなくなった時には移民政策研究所の看板を下ろすこと、これが私の引退のシナリオである。

一九七五年の『今後の出入国管理行政のあり方について』から二〇二二年の『移民国家日本は世界の頂点をめざす』までの四七年間に生産した論文集は極左と極右の双方から身の危険を感じるような攻撃にさらされた。のみならず劣化が著しい知的世界はその存在自体を見て見ぬふりをした。もとより論評の対象になることはなかった。坂中英徳の知的生産物は徹底的に無視されたのである。前途が真つ暗の絶望感にさいなまれる日々がエンドレスに続いた。

だが一〇年ほど前から達観の域に入った。彼らとは棲む世界が違くと割り切った。以

前にも増して破天荒の論文を書き続けている。そうこうするうちに日本の知的世界の評価など気にならなくなった。一〇〇年後の世界のひとつひとつの評価が気になるようになった。

学生時代から平凡な人間として生涯を終えるのが定めと思っていたが、「坂中論文」「ミスター入管」「反骨の官僚」「人類の救世主」などのレッテルを貼られて平穩な生き方は早々に断たれた。世間から注目される存在になった後は緊張感のゆるむことのない職業人生を過ごした。責任を一人で背負う立場から解放されたいというのが今の正直な気持ちである。

英文著作の傑作を発表して海外の代表的知性から高い評価を受けた。これ以上のものは何も要らない。死ぬべき時が来たら普通の人として人生の幕を閉じたい。

独創的な論文で始まり独創的な論文で終わる人生を全うした。天運と天職を独り占めするような人生であった。日本の移民政策の世界の“オンリーワン”の存在であった。移民政策一路の道を歩んだ。いつの間にか無我の境地に達した。日本の移民政策の原理と倫理を綴った著作集は不滅である。これ以上の充実の論文人生はないと思っている。

5 公明正大の道を歩んだ

日本の政治は移民国家の創建の方向に針路をとった。日本型移民国家の道を切り開いた先駆者として、新しい国づくりに参加する国民を牽引する責任の重さが胸に迫る。

同時に、移民政策の専門家として、移民法制の整備など一人では背負いきれないミッションを完遂できるか。各方面からの批判に対して初志を貫けるか。心配の種がつきることはない。

日本の興亡がかかる大業をやり遂げなければならぬ責任を負っているというのに、これから何をなすべきか、どう生きるべきかについて自問自答する毎日である。これは神の領域の話だが、どのようなタイミングで死を迎えるのが適当かについて真剣に考えている。

そもそも歴史的な仕事をする人間の器でないことは自分がいちばんよくわかっていゝる。英傑でも権力者でもない。研究員のいない研究所の所長である。世界に冠たる移民政策の立案に献身したこと、移民政策学をきわめたことを誇りに思う一学徒にすぎない。年をとって穏やかな人柄になった。往年の反骨の官僚の面影はない。移民政策を推進

する馬力も難関を突破するパワーもない。ひとりぼっちの孤立無援の身で国民の期待にこたえられるのか。以上のようなことを考えて一人で悩んでいる。

人間ができていない私が大望を語るのは気が引けるが、移民国家の産みの親にふさわしい人間になりたいと思っっている。私の理想とする人物像は修羅の妄執を超越した達観の士だ。

それは宮本武蔵のような剣の達人が晩年に達した心境である。剣を抜いて闘うことをやめ、ただそこに存在するだけで風格が漂うような人だ。具体的に言えば、①移民国家日本の創始者にふさわしい徳を備えた人間になること。②移民政策研究の世界的権威と認められること。③世界で通用する移民国家ニッポンの顔になること。以上のような身のほど知らずのことをまじめに考えている。

正堂堂の道を歩んだ。世界のひとびとが感動する論文をひたすら書いた。無私の日本人として一生を全うすれば、一〇〇年後の地球市民時代には美しい花が咲き誇っているかもしれない。

6 人類の救世主の出番が来た

「核攻撃も辞さない」と公言するプーチンロシア大統領のウクライナへの軍事侵攻など第三次世界大戦の脅威が迫る二〇二二年七月。人類共同体哲学の創始者として世界に知られる坂中英徳の出番が来たと認識する。英文書籍『Japan as an Immigration Nation』の根本理念である人類共同体哲学で理論武装し、「核戦争も辞さない」と公言してはばからないプーチン大統領批判を展開する。人類共同体哲学すなわち世界平和哲学は核戦争に対する反対命題としても威力を発揮すると考えている。坂中平和哲学が世界平和を願う世界の人々の連帯の輪を広げる一助になれば幸いである。

ここで第二次世界大戦後の国際法秩序がいま重大危機にあることを強調しておきたい。プーチン氏が率いる独裁国家ロシアには曲がりなりにも言論の自由がある。選挙権が保障されている。国民の政治意識も高い。いっぽう習近平氏が率いる中国においては共産党独裁体制が続いている。国民が政治家に物申すことは許されない。政治的発言をすれば厳罰に処せられる。中国は選挙権も思想の自由も言論の自由もない国であることを世界の知性は認識すべきだ。

戦争反対の国民世論が許されない国の習近平国家主席の率いる中国は戦争反対の国民世論が曲がりなりににも存在するプーチン大統領のロシアよりもいっそう危険な存在であることを、自由民主主義陣営の政治指導者は肝に銘じるべきだ。

プーチン大統領の暴挙後の世界は一体どこに向かうのだろうか。自由と国民主権を国是とする日本や欧米諸国が中心の自由民主主義国家連合と、共産党独裁国家中国や専制主義国家ロシアが中心の全体主義国家連合の対立・抗争が激化すると私は考えている。

そればかりか第三次世界大戦（核戦争）の蓋然性が高まると認識している。万が一にも世界的規模の核戦争が起きたときには、私が主張する人類共同体哲学は絵に描いた餅に終わる。「坂中英徳が理想論を声高に叫んだが世界の政治指導者から完全に無視された」と物笑いの種になる。私の立てた崇高な理念ははかない夢に終わる。

しかしながら核兵器による億単位の犠牲者をもたらした第三次世界大戦が終わった後には、核戦争を始めた政治指導者を糾弾するスローガンを掲げて立ち上がる人々が爆発的に増えるだろう。あるいは世界の代表的知性の中で核兵器廃止条約の作成の動きが高まるかもしれない。

坂中英徳が提唱する人類共同体哲学は世界の普遍的理念の一つとして悠久の世界平和

を願うひとびとの心に深く刻まれると確信している。

7 人類共同体社会の創造か、核戦争による人類の滅亡か

一七億のイスラム教徒を擁するイスラム文明との敵対関係が激化する一方の西洋文明の明日はないと予感する。中国経済の発展、中国の覇権主義の動きなどを契機に露見した中国人を敵対視する西洋文明の器量の狭さに驚きを禁じ得ない。いっぽう中国五〇〇〇年の歴史において自由で民主主義の政治制度を一度も経験したことがない漢民族の政治体質がすべての問題の根源にあることは明らかだ。

近い将来、「西洋文明と中国文明のいいところを受容した日本文明の出番が来る」と、私は考えている。しかし「言うのは簡単だが実行するのは難しい」と言わなければならぬ。すなわち「中国文明と西洋文明の双方から多大の恩恵を受けた日本文明が両文明間の橋渡し役を果たすことができるのだろうか。あらゆる神々の間に甲乙はないと考える日本文明が、今日の世界が直面する最大の危機と言うべきキリスト教とイスラム教の

宗教戦争に待ったをかけることができるのだろうか。『文明の衝突』（サミュエル・ハンチントン）の時代を乗り越える叡智と器量が日本民族に備わっているのだろうか。

私は現代世界を比較文明的立場から俯瞰し、普遍性にかげりが見られる西洋文明の終焉の日が近づき、これから世界の思想界は地殻変動の時代に入ると認識する。今後、世界の叡智を結集し、新しい世界精神と世界秩序を模索する動きが出てくるだろう。その場合、西洋とは異質の精神文化と世界観がある日本文明が新世界文明の創造において中心的役割を果たす必要があると、私は繰り返し述べている。

コロナウイルス問題が発生する数年前から、西欧社会において人種差別・宗教差別・移民排斥の考えが急速に広まりつつあった。トランプ前米国大統領を先頭に排外主義者たちが声高々に「移民はノー」と叫ぶ異様な光景が見られた。人種間、宗教間の対立が先鋭化し、歴史の歯車が狂ったとしかいえないような異常事態が露見していた。最近の私は、サイバー戦争もしくはAI戦争が引き金となって核兵器を使用した第三次世界大戦が勃発する恐れすらあると危機感を覚える時がある。

欧米社会において移民・難民問題が危険水域に入った今のタイミングで、世界の政治指導者の一人である日本の首相が「日本国民は人類共同体の理念の下に五〇年間で

一〇〇〇万人の移民を歓迎する」と、世界の人々に約束する時が来た。これまで移民・難民問題で何ら国際貢献をしてこなかった日本国民が移民・難民開国を政府に迫る時だ。人類共同体哲学の創始者の私とその先頭に立つ。

空想するのが好きな私は、核戦争のない時代が訪れるとしても、第三次世界大戦（核戦争）で世界が億単位の人的犠牲を払った後のことではないかという危険な考えに襲われる時がある。

さらに言えば、愚かなる人類は「地球規模の核戦争を何度も経験して初めて『人類は運命共同体』という真理が現実の意識にのぼり、人類共同体社会の創成の必要性と緊急性を理解するようになる」という考えが脳裏をかすめる時もある。

人類共同体社会と世界平和体制の確立を提唱する坂中英徳は同時に「人類最期の日」を空想する悲しい性さがの持ち主である。

8 憲法第九条を擁する日本が国際貢献するとき

核兵器を使用した第三次世界大戦が視界に入った二〇二〇年代。人類共同体ビジョンを展開した学術書『JAPAN AS AN IMMIGRATION NATION』（移民国家日本）をバイブルとし、私たちは人類共同体社会の実現に向かって前進する。坂中英徳は人類共同体哲学の生みの親としての大役を果たす。

国家公務員を卒業した後の一七年間に五〇冊ほどの専門書を出版した。その理論体系は富士山のように雄大である。なかでも人類共同体論は世界の思想界に衝撃が走った。世界の代表的知性が新鮮な発想に驚いた。

英文著作で人類史に新しいページを開いた坂中英徳が世界の移民政策の歴史的転換を迫る。人類共同体社会の全体像を描いて移民政策理論に魂が入った。たとえ当世に志を得なくとも、世界革命が成らずして天命が尽きても、理想の人類社会を創造する壮図を抱いて筆をとった坂中全集は人類の未来を照らす鑑として永遠に輝いているだろう。

「核戦争も辞さない」という暴言を吐いたプーチンロシア大統領を筆頭に核超大国の

軍首脳は最新鋭の兵器の威力を試したいという野望を抱いているのではないかと想像する。しかし、米国、ロシア、中国の政治指導者が普通の人間の神経の持ち主なら地球規模の核戦争という暴挙に出ることは金輪際ないというのが常識的な見方である。

広島・長崎の惨禍を目の当たりにした日本人の脳裏には生き地獄のような光景が刻まれている。広島・長崎の犠牲者の数百倍の死者が出る可能性がある第三次世界大戦に向かって猛進する暴君も将軍もいないと信じる。しかしながらヒトラーのような狂信的な人間の野心から第二次世界大戦へと突き進んだのが二〇世紀の戦争の歴史であったことを私たちは決して忘れてはならない。

人類共同体哲学の泰斗は、日本国憲法第九条の啓発活動に全霊を傾けるとともに、旺盛な著作活動を通して第三次世界大戦は絶対反対の世論を喚起する運動の先頭に立つ。

坂中英徳（さかなか ひでのり）

1945年生まれ。

1970年、慶応義塾大学大学院法学研究科修士課程修了。

同年法務省入省。東京入国管理局長などを歴任し、2005年3月退職。同年8月に外国人政策研究所（現在の一般社団法人移民政策研究所）を設立。

法務省在職時から現在まで、在日朝鮮人の処遇、人口減少社会の移民政策のあり方など一貫して移民政策の立案と取り組む。近年、50年間で1000万人の移民を受け入れる「日本型移民国家ビジョン」と、全人類が平和共存する「人類共同体社会の理念」を提唱している。2020年、人類共同体哲学を全面展開した英文図書『Japan as an Immigration Nation』を出版。現在、移民政策研究所所長。

核戦争勃発か人類共同体創成か

発行日：2022年10月1日

著者：坂中英徳

発行所：一般社団法人移民政策研究所

〒133-0056

東京都江戸川区南小岩5-17-20

<http://jipi.or.jp>

※本書籍の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・改竄すること及び、有償無償に関わらず第三者に譲渡することを禁じます。

